㈶松江市教育文化振興事業団
文化財調査報告書　第２集

文化財愛護
シンボルマーク

論田４号墳発掘調査報告書

（付編　論田横穴群概要報告）

1994年３月

松江市教育委員会

㈶松江市教育文化振興事業団

㈶松江市教育文化振興事業団
文化財調査報告書　第２集

文化財愛護
シンボルマーク

論田４号墳発掘調査報告書

（付編　論田横穴群概要報告）

1994年３月

㈶松江市教育文化振興事業団

例　　言

1．本書は、平成５年度において松江市教育委員会が松江市市道中の前緑山線道路改良工事に伴う事前調査として実施した「論田４号墳」発掘調査の成果を、財団法人松江市教育文化振興事業団が整理して作成した発掘調査報告書である。

2．調査の組織は下記のとおりである。

主　体　松江市教育委員会

教　育　長　　諏訪　秀富
生涯学習部長　松尾　光浩（平成５年５月まで）
〃　　中西　宏次（平成５年６月から）
文化課長　　中西　宏次（平成５年５月まで）
〃　　村松　　榮（平成５年６月から）
文化財係長　　岡崎雄二郎

調査者　主　　事　　金山　正樹（平成５年６月まで）
調査補助員　　江川　幸子（平成５年６月まで）
〃　　山尾　絹江（平成５年６月まで）
作　業　員　　井上栄子・勝田ムラ子・坂本美佐子・田中キクエ
田中　芳・永瀬速子・船木昭吉・船木京子・三島盛次郎

財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課（平成５年７月１日新設）
理　事　長　　吉岡　俊雄（平成５年７月から）
事務局長　　日高　稔夫（平成５年７月から）
調　査　員　　江川　幸子（平成５年７月から）

3．調査にあたっては、土地所有者である岡崎屋木材株式会社代表取締役、安来賢吉氏より終始多大な協力をいただいた。また、島根県教育庁、足立克己氏からも有益な調査指導をいただいた。記して感謝したい。

4．遺構の実測は金山、江川、山尾がおこない、遺構の写真撮影は金山、江川がおこなった。

5．図面中で使用した方位はすべて磁北を示しており、高さは海抜高を表している。

6．遺物の実測、浄書、写真撮影、執筆・編集は江川がおこなった。

7．遺物整理にあたっては、荻野哲二（松江市教育委員会）の協力を得た。

8．付編として掲載した論田横穴群に関する報告は、遺構については中尾秀信の原稿に江川が加筆し、遺物については江川が執筆した。遺構図は当時の図面を江川が浄書し、遺物図は今回改めて江川が実測、浄書した。拓本は、荻野がおこなった。写真は、遺構については当時のフィルムを使用し、遺物については江川が撮影した。全体の編集は江川がおこなった。

文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年５月26日に文化財保護委員会(現文化庁)が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗栱（ときょう）、すなわち斗（ます）と栱（ひじき）の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していこうというものです。

文化財愛護
シンボルマーク

本 文 目 次

Ⅰ. 位 置 と 環 境 …… 1
Ⅱ. 調査に至る経緯 …… 3
Ⅲ. 調 査 の 概 要 …… 4
Ⅳ. 論 田 4 号 墳 …… 6
●遺　構 …… 6
●遺　物 …… 9
Ⅴ. 周 辺 の 遺 構 …… 16
Ⅵ. 小　　結 …… 19
Ⅶ. 付編　論田横穴群 …… 21
●1 号 穴 …… 23
●2 号 穴 …… 24
●3 号 穴 …… 32
●4 号 穴 …… 37
●5 号 穴 …… 45
●小　結 …… 49
Ⅷ. 写 真 図 版 …… 51

挿 図・表 目 次

（論田4号墳）

第1図　論田4号墳位置図 …… 1
第2図　周辺の地形と遺跡 …… 2
第3図　発掘前地形測量図 …… 5
第4図　4号墳セクション図 …… 7～8
第5図　排水溝平面図・セクション …… 9
第6図　4号墳主体部平面図および遺物出土状況 …… 10
第7図　主体部内出土須恵器実測図 …… 11
第8図　盛土内出土遺物実測図 …… 13
第9図　4号墳盛土内出土遺物実測図 …… 14
第10図　完掘後地形測量図 …… 15

第11図　小型石棺実測図 …… 17
第12図　土壙１平面図およびセクション図 …… 18
第13図　土壙２平面図およびセクション図 …… 18
第14図　土壙２出土遺物実測図 …… 18
第15図　遺構に伴わない遺物実測図 …… 18
第１表　論田４号墳主体部内出土遺物観察表 …… 12

（付編　論田横穴群）

第１図　論田１号穴平面図および遺物出土状況図 …… 23
第２図　論田１号穴出土遺物実測図 …… 23
第３図　論田２号穴平面図および遺物出土状況 …… 25～26
第４図　２号穴石棺実測図 …… 27
第５図　２号穴出土遺物実測図(Ⅰ) …… 28
第６図　２号穴出土遺物実測図(Ⅱ) …… 29
第７図　２号穴出土遺物実測図 …… 30
第８図　論田３号穴 …… 33
第９図　論田３号穴 …… 34
第10図　論田３号穴出土遺物実測図(Ⅰ) …… 35
第11図　論田３号穴出土遺物実測図(Ⅱ) …… 35
第12図　論田４号穴平面図および遺物出土状況 …… 39
第13図　論田４号穴出土遺物実測図(Ⅰ) …… 40
第14図　須恵器の大甕実測図(Ⅱ) …… 41～42
第15図　４号穴出土遺物実測図(Ⅲ) …… 43
第16図　論田５号穴平面図および遺物出土状況 …… 46
第17図　５号穴出土遺物実測図 …… 47
第１表　論田１号穴出土遺物観察表 …… 24
第２表　論田２号穴出土遺物観察表(Ⅰ) …… 30
第３表　論田２号穴出土遺物観察表(Ⅱ) …… 31
第４表　論田２号穴出土遺物観察表(Ⅲ) …… 31
第５表　論田３号穴出土遺物観察表(Ⅰ) …… 36
第６表　論田３号穴出土遺物観察表(Ⅱ) …… 36
第７表　論田４号穴出土遺物観察表(Ⅰ) …… 43
第８表　論田４号穴出土遺物観察表(Ⅱ) …… 44
第９表　論田４号穴出土遺物観察表(Ⅲ) …… 44
第10表　５号穴出土遺物観察表 …… 48

写真図版目次

（論田４号墳）

図版１　作業風景 …… 51
図版２　論田４号墳調査前 …… 52
図版３　墳　　頂 …… 52
図版４　周溝平面プラン検出状況 …… 53
図版５　山手側周溝セクション …… 53
図版６　残丘検出状況 …… 54
図版７　残丘検出状況 …… 54
図版８　主体部セクション検出状況 …… 55
図版９　主体部内遺物出土状況 …… 55
図版10　主体部検出状況 …… 56
図版11　主体部検出状況 …… 56
図版12　排水溝検出状況 …… 57
図版13　小型石棺 …… 57
図版14　盛土除去後 …… 58
図版15　論田４号墳から松江市街を眺む … 58
図版16　論田４号墳主体部内出土須恵器 … 59
図版17　論田４号墳盛土内出土遺物 …… 60
図版18　論田４号墳盛土内出土遺物 …… 60
図版19　土壙１内出土遺物 …… 61
図版20　遺構に伴わない遺物 …… 61

（論田横穴群）

図版１　発見当初の論田横穴群 …… 63
図版２　論田横穴群遠景 …… 64
図版３　論田横穴群近景 …… 64
図版４　２号穴前庭遺物出土状況 …… 65
図版５　２号穴羨門 …… 65
図版６　２号穴組み合せ横口式家形石棺 … 66
図版７　２号穴組み合せ横口式家形石棺 … 66
図版８　３号穴羨門 …… 67
図版９　３号穴玄室内遺物出土状況 …… 67
図版10　３号穴(右)と４号穴(左)の位置関係 … 68
図版11　４号穴羨門 …… 68
図版12　４号穴前庭奥左角遺物出土状況 … 69
図版13　４号穴玄室 …… 69
図版14　５号穴を前庭から見る …… 70
図版15　５号穴前庭奥左角遺物出土状況 … 70
図版16　論田１号穴出土遺物 …… 71
図版17　論田２号穴出土遺物 …… 71～73
図版18　論田３号穴出土遺物 …… 73～75
図版19　論田４号穴出土遺物 …… 75～77
図版20　論田５号穴出土遺物 …… 77～78
図版21　論田４号穴出土人骨 …… 79

I. 位 置 と 環 境

論田４号墳は，島根県松江市西津田10－1432－１に位置する。

松江市は島根県の県庁所在地で，過疎になやむ県内で約14万人の人口を有する土地である。地形的には南北を山地に挟まれ，東西を汽水湖に挟まれ，その間に平地がひろがってそこに人口が集中している。内陸の地でありながら汽水湖である宍道湖や中海に恵まれ，現在においても食生活の面において多大な恩恵をうけている。食物に不自由したであろう過去においても比較的良好な生活の場が営まれていたのではないかと推察される。

古代において出雲国国庁がおかれたのは松江市大草町近辺の意宇平野で，以来今日に至るまで松江市周辺は地域の中心として発展してきた。このような地であるから周辺の遺跡の数は周知のものだけでも莫大な数にのぼり，限られた紙面上ではとても紹介しきれない。周辺の遺跡について詳細が必要な場合は「松江市遺跡地図」（1991年・松江市教育委員会）を参照されたい。

さて，論田４号墳は論田古墳群の中の１基で，宍道湖や大橋川を見おろす平地に囲まれた低丘陵上

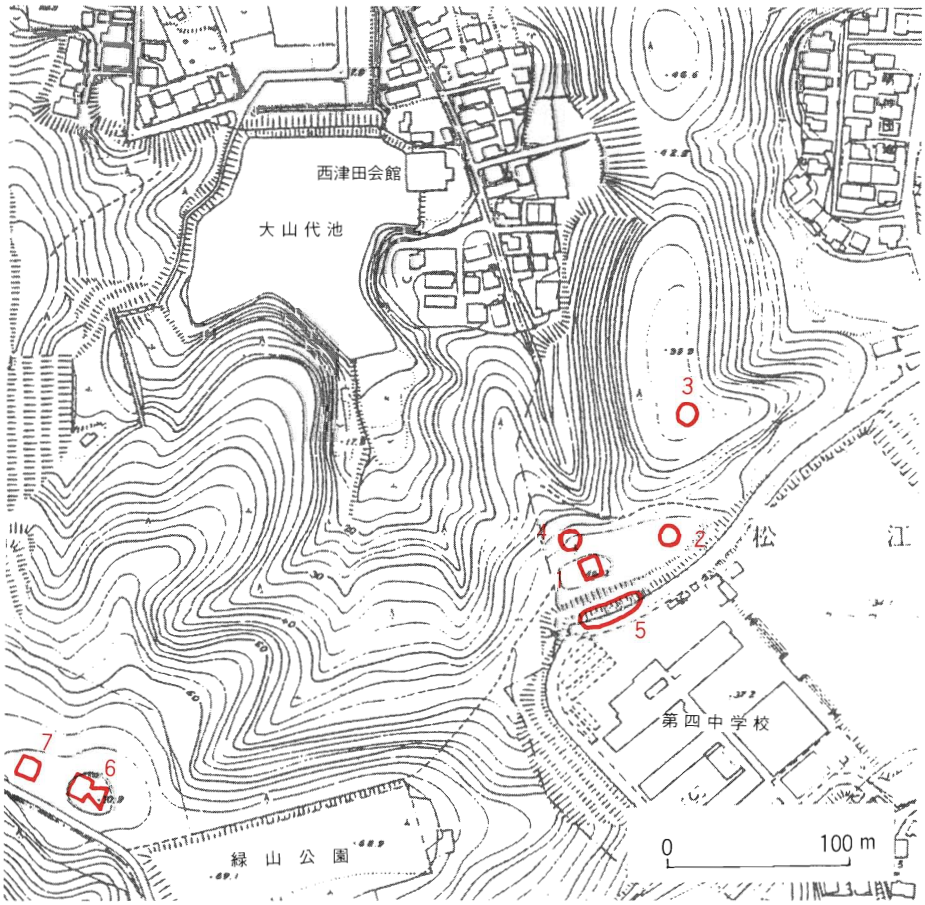
第１図　論田４号墳位置図

に位置している。この近くの丘陵尾根上には，岡古墳群や室藤古墳群，そして字論田地内ではこれまで１～３号墳までの３基の古墳が知られていたが，平成４年度の開発にともなう事前分布調査・試掘調査により新たに４号墳の存在が明らかとなった。

論田古墳群について少々述べると，１号墳は丘陵尾根上に築造されており，整然とした方墳で，盛り土の残りはきわめて良い。今回平板測量する機会に恵まれ，正確には１辺約８ｍの方墳と判明した。４号墳とはきわめて近接した位置に築造されている。２号墳は１号墳の東方約50ｍ離れた地点に位置し，かつて開発に伴う発掘調査が試みられている。主体部は組み合せ石棺で，石棺が半分だけ検出されたが諸般の事情により調査は中止され，遺構は埋め戻されている。３号墳は谷をはさんだ別の尾根上に位置するが，墳形等詳細は不明である。

ところで，1980年，論田１号墳のすぐ下の南東斜面で工事中に５穴（以上）の横穴墓が発見され，緊急調査が実施されている。出土遺物から判断すると，各横穴とも時期的には６世紀末頃造営されたようである。論田古墳群に埋葬された人々に次ぐ世代の埋葬場所であろう。ちなみにこの横穴群の調査成果を，この場をかりて少々紹介しておきたいと思う。ただ，調査から長い年月を経ているため不明となった事柄・遺物も多いのだが，現時点でできるだけの事をしておきたいと思う。

さて，この丘陵は周囲を平地に囲まれた微高地で，遺跡を包蔵する可能性の非常に高い場所と推察されるが，その反面，現在においては開発の的として最も注目され易い場所でもある。今後の開発に伴う事前分布調査・試掘調査ではさらなる精緻・慎重さが必要と思われる。



第２図　周辺の地形と遺跡

Ⅱ. 調査に至る経緯

平成３年度において，社団法人松江市西津田共栄会が「大山代池周辺運動公園整備事業」を計画した。そこで依頼を受けた松江市教育委員会は平成３年11月20日，計画区域内における埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果，遺物・遺構は確認されなかったが，樹木繁茂のため視界が悪く，伐開後に再度分布調査を実施する事にして調査は一時中断する事になった。

しばらくして伐開が終了し，今度は平成４年６月22日付けで松江市建設部土木課より「市道中の前緑山線道路改良工事」に伴う埋蔵文化財分布調査の依頼があり，松江市教育委員会はこれを受けて同年７月７日，隣接する「大山代池周辺運動公園整備事業」計画区域内と併せて分布調査を実施した。

その結果，論田１号墳のすぐ近くの「市道中の前緑山線道路改良工事」計画区域内に，径約７ｍの低いマウンド１カ所を発見した。このマウンドが古墳であるか否か，さらに明確な裏付けを得るために，同年８月６，７日の２日間試掘調査をおこなった。具体的な内容としては，マウンド中央から下方に向かって1.5×7.0ｍのトレンチを１本設定して地山面まで掘り下げた。セクションを観察すると表土下に盛土が見られ，マウンド中央付近の地山直上からは須恵器の蓋坏が出土した。したがって，これを論田４号墳と呼称し，「市道中の前緑山線道路改良工事」では，古墳の半分強がのり面として削り取られる計画となっていたため，全面発掘調査を実施するはこびとなった。

Ⅲ. 調 査 の 概 要

前記のような経緯をたどり，松江市教育委員会は平成５年５月10日より現地発掘調査に入った。調査地の脇ではすでに重機が作業を開始しており，本古墳の約半分が削りとられる予定であったため早急な調査が要求された。

論田４号墳の墳丘はほとんど残っておらずわずかに高まりが観察できる状況であったが（第２図），平成４年度の試掘トレンチによりおおよその墳丘規模が推定できたので，十文字にトレンチを設定して残丘状況を観察したのち，畦を残して残丘上に堆積した表土を少しずつ剝いでいった。その結果，セクションからも平面プランからも山手側を中心に弧を描くしっかりした周溝が確認されたので，円墳と判断された。

主体部については巨大な松根のため平面的な精査ではその確認が困難であったのだが，トレンチの土層堆積状況から，残丘上面から地山まで掘りこんだ土壙と，その中に木棺直葬の特徴である弓形土層が観察された。よって，主体部は木棺直葬の土壙であることが確認された。当初に設定した畦がほぼ土壙の主軸とそれに直交する位置にあったため，畦を残して土壙埋土の除去をおこなった。地山直上からは須恵器の蓋坏９点が出土した。これらは土壙の畦を取りはらい，土壙全体と遺物の位置関係をおさえる写真撮影を終えるまでは現位置にとどめておくつもりであったが，５月20日の朝，現地に着くと主体部上にかぶせておいたシートがはぐられて遺物が破壊され，また畦も一部壊されるという悪戯にあっていたため，急ぎ遺物出土状況写真・遺物出土状況図をとり，遺物の取り上げをおこなうこととなった。盛り土，主体部埋土，周溝のセクションも急ぎ実測した。

残丘と主体部の様相を確認した後は墳丘の除去をおこなった。旧表土もすべて除去して地山面まで掘り下げたところ，土壙の西端の大きめの石が秩序よく並べられたところから，そこを起点として西方に向かって設けられた排水溝が検出された。溝内には小石片数点が散在するだけで，掘り込み以外の施設は認められなかった。排水溝を実測して，古墳に関する調査は終了した。

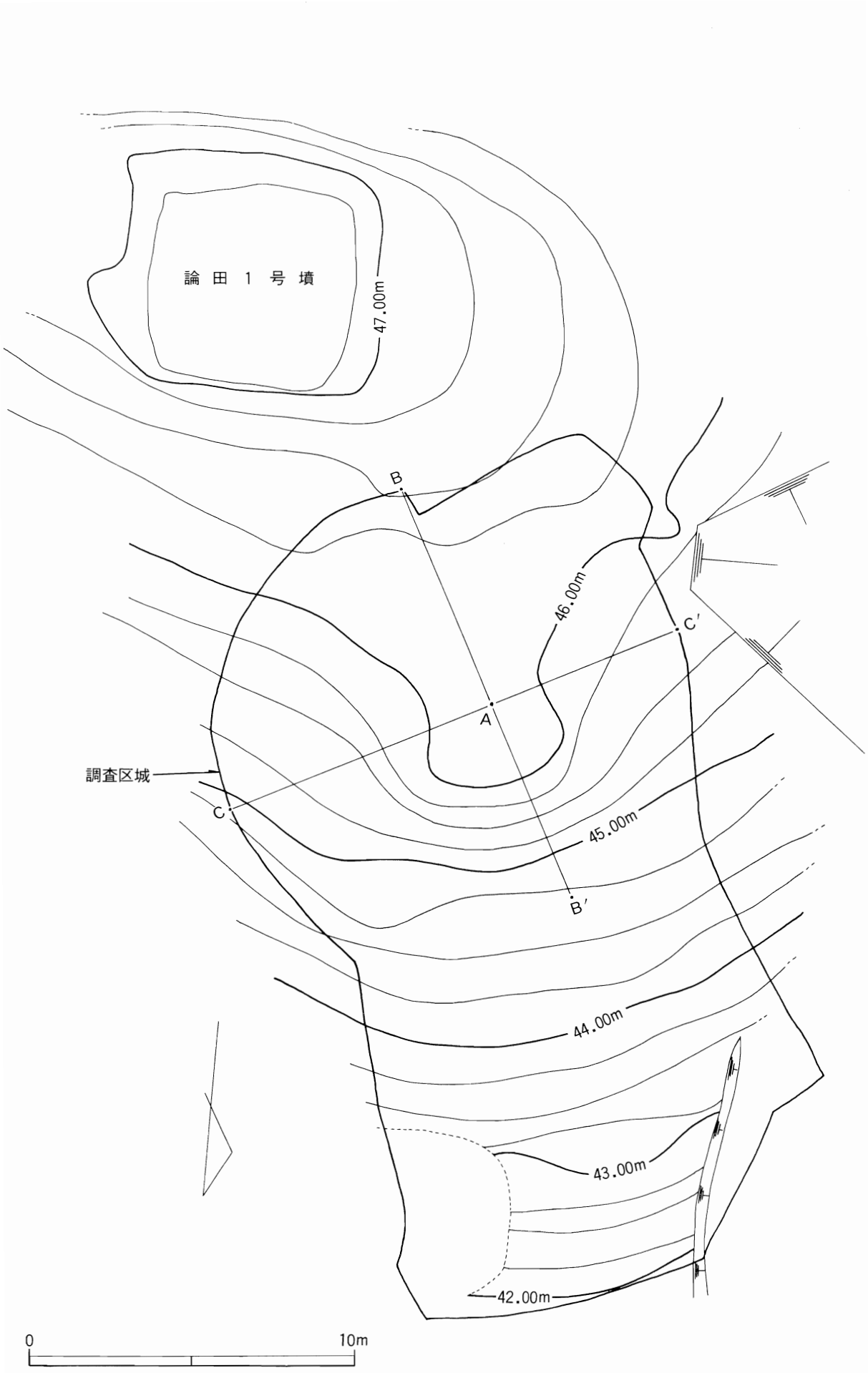
ところが，盛土内から黒耀石の小片が少なからず検出され，縄文土器片１片も出土していたため，島根県教育庁文化課の指導のもとに調査範囲を拡張することにした。大木の根やササの繁茂があったため，重機で表土を削りとり，そのあとを人力で掘り進めることにした。その結果，古墳の北方では性格不明の土壙２基，古墳の南西では小型石棺１基が検出された。小型石棺についてはぎりぎりのラインで開発範囲から外れていたため，掘り方までを図面化してあとは砂を入れて埋め戻すことにした。

以上を終了した後，地山検出状況の平板測量を実施した。

また，１号墳が極近い位置関係にあったため，おりをみて平板測量をおこなった。

１号墳はかつて昭和60年に測量をおこなっているが，今回は絶対高でコンタをいれた事，そして国土座標に結びつけられた点に成果があるといえよう。

平成５年６月23日，論田４号墳とその周辺の調査を終了した。



第 3 図　発掘前地形測量図

Ⅳ. 論田４号墳

●遺構について

（墳　丘）

南が高く北が低い標高45m付近の緩傾斜地に立地している。北を見おろすと大橋川や松江市街が一望できるとても眺めの良い場所である。東を望むと現在は市街地化しているが，10数年前までは谷を挟んで低丘陵が続いていたとのことである。

さて，盛土の残存状況は非常に悪かったが，トレンチの土層観察および残丘上堆積土除去の結果，東西約８m，南北約8.5m，そして周囲に約１m幅で円形に周溝がめぐる円墳であることがわかった。ちなみに残丘高は最高部で地山上約0.7mほどであった。

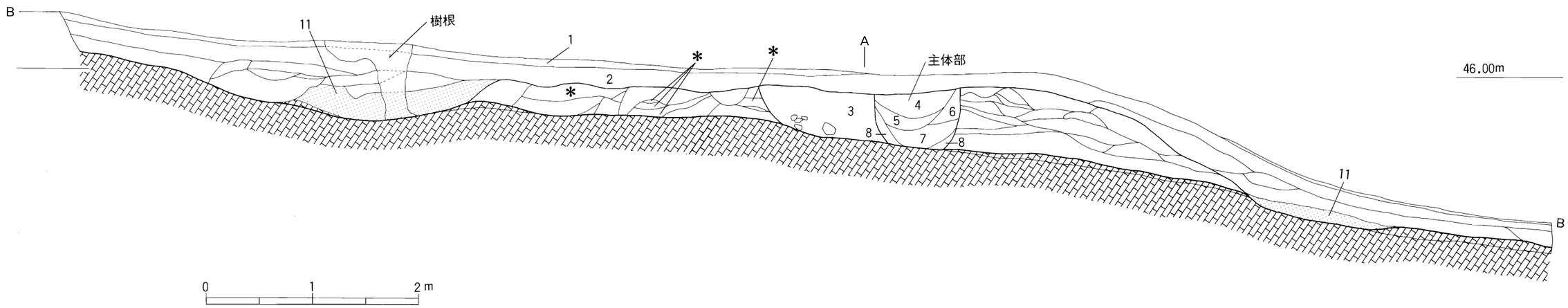
築造方法は，南側の高部にやや深めの溝を掘り，旧表土上に溝掘削の際に出た土も含め，周囲の土を利用して盛り土している。後期古墳の典型的な形態を示すが，古墳の全周，つまり北側の低い部分にも浅いながらも周溝を意識したくぼみがめぐらされているといった面では丁寧なつくりが感じられる。盛土内には古墳に付随する遺物や石等は認められなかったが，黒耀石の剝片と磨製蛤刃石斧欠損品，縄文土器片が混入していた。

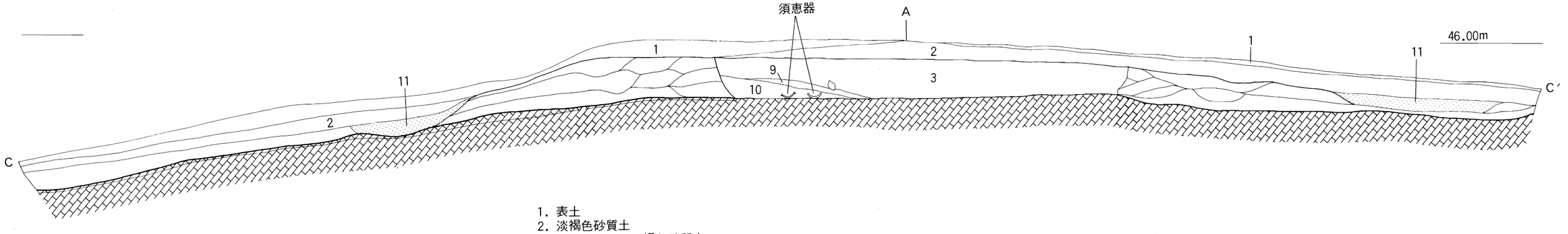
（主体部）

主体部は墳丘築造後に墳頂（残丘頂）から地山面までほぼ垂直に東西約４m，南北約２mの不整形な土壙を掘ったもので，段は認められなかった。トレンチで土層を観察すると土壙の北側に寄せて木棺直葬の特徴である弓状堆積が約80cm幅で認められたことから，幅約80cm強，長さ不明の木棺が直葬されていたものと判断された。木棺の幅に比べて土壙の幅がやや広すぎるようであるが，木棺設置場所以外の土壙埋土は単一土層で２体を埋葬した可能性は低いと思われる。ただ，棺等の施設を用いない埋葬があったとすれば２体がおさまるだけのスペースは十分にある。土壙の西端には大きめの石が並べられており，そこから南北方向に向けて周溝まで幅約0.4～0.6mの排水溝が検出された（第４図）。それは盛り土する以前に旧表土から地山をさらに５～10cm程度掘り込んだもので，敷石等の施設は無く，木材等の有機材料を用いて構築されていたものと思われる。

さて，土壙埋土についてだが，盛土中はもちろん周囲の堆積土や地山にはほとんど石が含まれていないのに対し，土壙埋土中には山石を砕いたような５cm前後の角ばった小石が多数混じっていた。磨製蛤刃石斧の欠損品１点も混入していた。その分布状況は木棺設置場所と推定される土壙北側部分にやや集中してしていたようであるが，土壙全体に上下を問わず散在しており，こめ石的性格のものではないと思われる。何らかの意図をもって意識的に混ぜられたことだけは確かであるが，性格については不明である。

遺物は，木棺設置場所の東～南東の棺外と思われる場所に須恵器の蓋坏９個体が，内６個体は蓋坏が重ねられた状態で出土した。いずれも埋葬当時の位置を大きく動いていないようである。また，木





1. 表土
2. 淡褐色砂質土
3. 山石を多く含む褐色砂質土
4. 山石を多く含む淡褐色砂質土
5. 濁褐色砂質土
6. やや明るい淡褐色砂質土
7. 濁淡褐色砂質土
8. 褐色砂質土（Ⅰ）
9. 暗褐色砂質土
10. 褐色砂質土（Ⅱ）
11. 黒色粘質土（周溝）

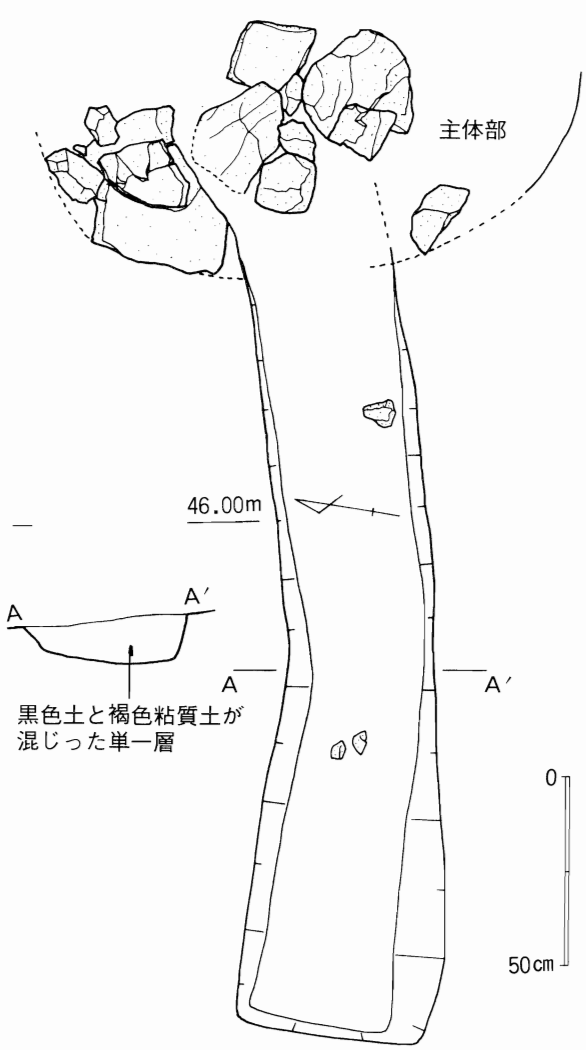
残丘盛土は細分しているが、濃淡の差こそあれ基本的には濁褐色土であるため、詳細な土色・土質説明は省略する。
ただ＊印をつけた層は、地山の明橙色土、もしくは明橙色土を多く含む濁褐色土で特筆しておく。

（A，B，Cは第３図に対応する）

第４図　４号墳墳丘セクション図

棺外の広いスペースには現在には残らない有機質の副葬品がおさめられていた可能性も十分考えられる。

出土した副葬遺物は上記した須恵器の蓋坏計９点のみで，いずれも土壙最下部，地山直上面に置かれていた。その出土状況について述べると，第５図に示した１は蓋で，２の坏の上に半分かぶさっている。３は坏が上下逆転した形状で，４の上下逆転した蓋の上に半分かぶさっている。５は蓋で６の坏の上にほぼかぶさっている。以上の６点はセット関係が明確な蓋坏であるのにたいし，７は単独の坏で，８は上下逆転した蓋である。９は上下逆転した坏であるが，昨年度の試掘調査以来現地にとどめていたため破損が著しく残存状況が悪い。



第５図　排水溝平面図・セクション

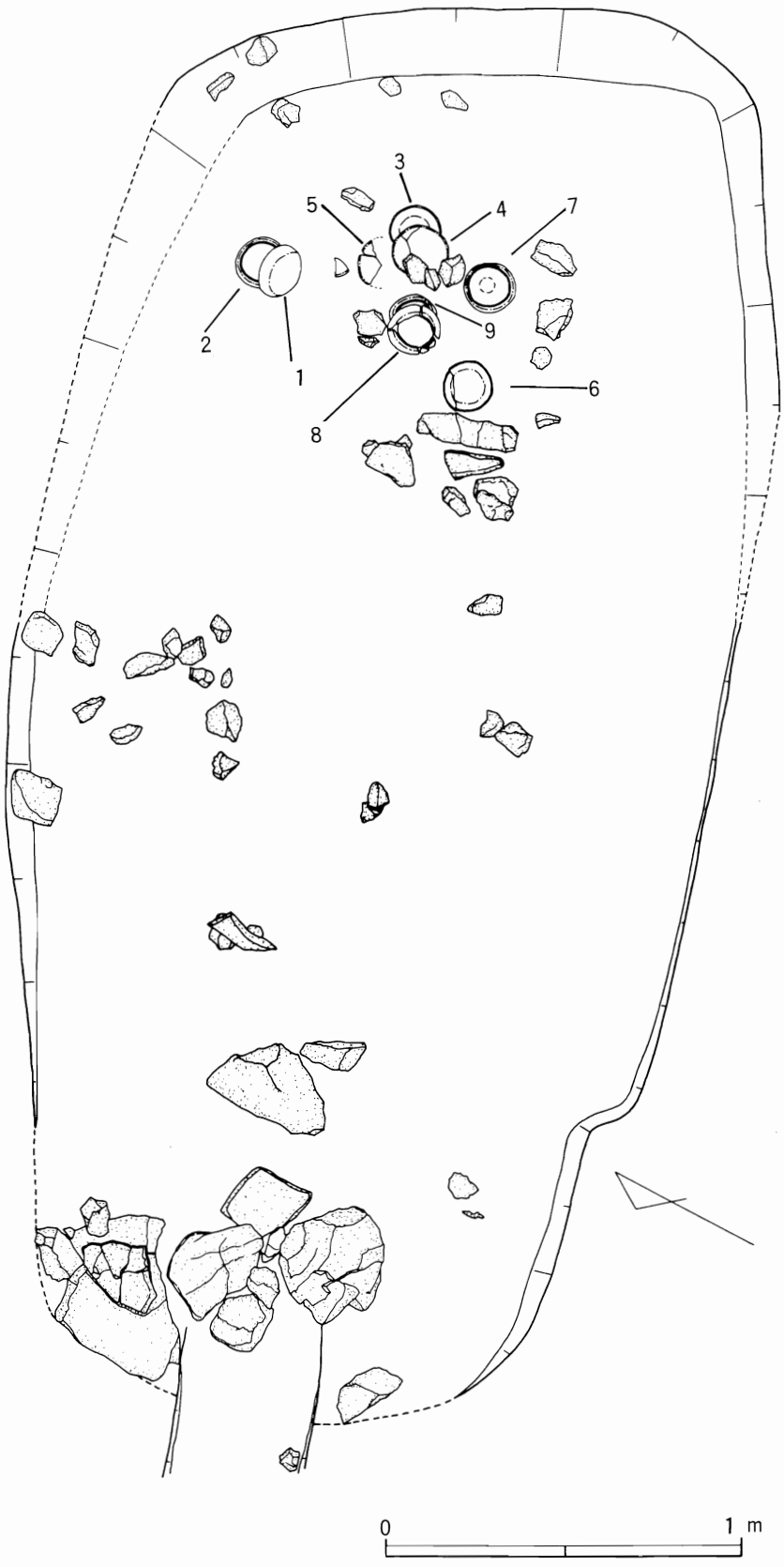
●主体部内出土遺物

主体部内部からは蓋４点，坏５点が出土した。（第５図）

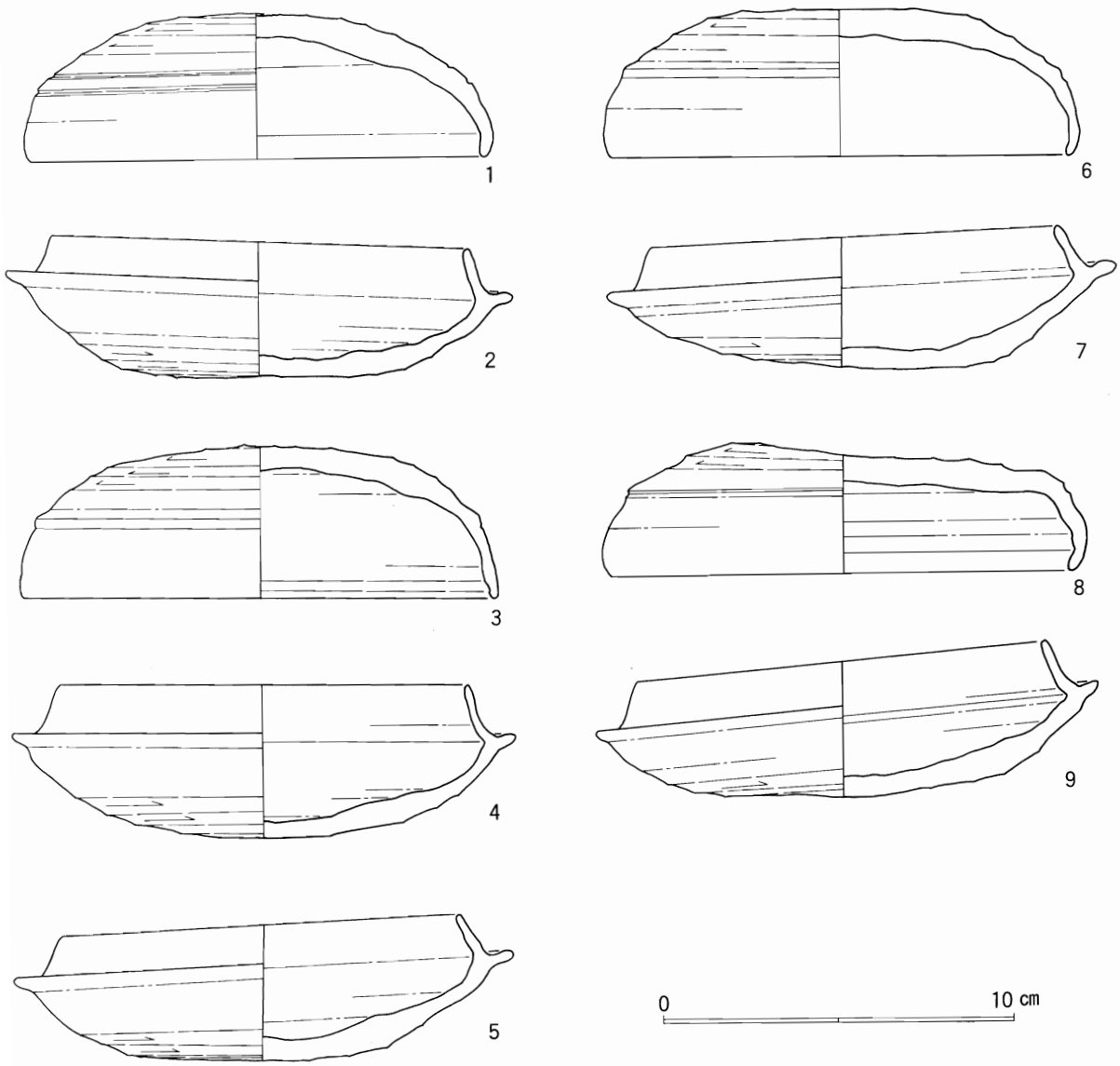
１と２，３と４，８と９はセット関係である。

蓋はそれぞれ若干の個体差は見られるもののほぼ同様の形態，手法をとっている。法量も近似しており，口径はいずれも13cm前後を測る。天井部は丸味を帯び，上半には丁寧な回転ヘラ削り調整を施している。天井部と口縁部の境の段は退化して低く，先端は丸く，シャープさがない。個体によっては沈線表現（１）に変化している。口縁部は内傾するものが多いが，１点に関しては外に開き，口縁内面に浅いナデ沈線がめぐる古い様相を残している（３）。坏もほぼ同様の形態，手法をとっている。法量も近似しており，口径は11.5cm前後を測る。口縁の立ち上がりは約1.5cmと比較的高いが，立ち上がり角度はやや内傾し，口縁内面の段は完全に消えている。底は回転ヘラ削り調整を施している。時期的には６世紀後半前葉に位置づけられると思われる。

個別の詳細については，表１．主体部内出土遺物観察表を参照されたい。



第6図　4号墳主体部平面図および遺物出土状況
（番号は第7図に対応）



第７図　主体部内出土須恵器実測図

第1表　論田4号墳主体部内出土遺物観察表

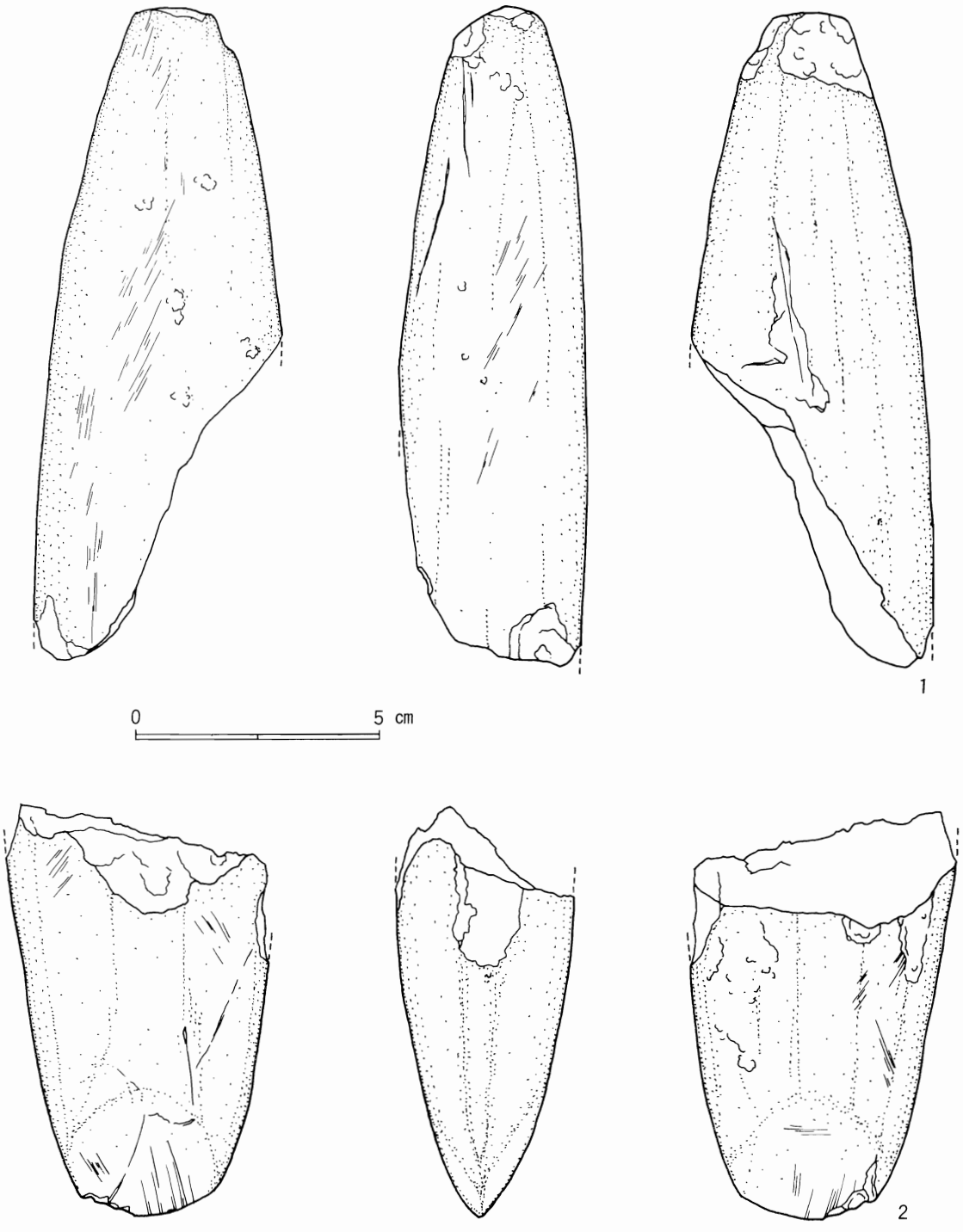
ただしNoは、第7図に対応する
(須)は須恵器を表している

No	器種	法　量	形態・調整の特徴など	備　考
1	蓋 (須)	口　径　12.9cm 器　高　4.1cm	天井部は丸く，回転ヘラ削り後，最頂部にヘラを平行に押し当てた痕跡を残す。天井部と口縁部の境の段は2条のヘラ描き沈線で表現されている。口縁部は内傾する。内面は回転ナデ後，中央部に不定方向の静止ナデ。完形で残存。	胎土　石英・長石微粒を少々含む 色調　(外)(内)灰色 焼成　良好 ロクロ　右回転
2	坏 (須)	口　径　11.8cm 受部径　14.4cm 器　高　4.1cm	底は丸いが，やや偏平で回転ヘラ削りを施す。立ち上がりは1.4cmで内傾する。内面は回転ナデ後，中央に軽く不定方向の静止ナデ。完形で残存。	胎土　石英・長石粒をわずかに含む 焼成　(一部軟) 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
3	蓋 (須)	口　径　13.6cm 器　高　4.4cm	天井部は丸く，頂部はやや平坦である。丁寧な回転ヘラ削りを施している。天井部と口縁部の境の段は丸みをおび退化している。口縁は外に向かって開き，内面にはナデ沈線がめぐる。内面は回転ナデ後，中央部に不定方向の静止ナデ。完形で残存。	胎土　石英・長石微粒を少々含む 焼成　やや軟 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
4	坏 (須)	口　径　11.6cm 受部径　14.3cm 器　高　4.5cm	底は丸く，丁寧な回転ヘラ削りを施している。立ち上がりは1.7cmと高く，内傾している。内面は回転ナデ後，中央部に不定方向の静止ナデ。立ち上がりの付け根には工具を押し当てて回転させたような鋭角の凹ラインがめぐる。完形で残存。	胎土　緻密だが,石英･長石微粒を少々含む 焼成　良好 色調　(外)(内)淡灰色 ロクロ　右回転
5	坏 (須)	口　径　11.3cm 受部径　14.2cm 器　高　4.3cm	底は丸いがやや偏平。丁寧な回転ヘラ削りを施しているが，座りが悪い。立ち上がりは1.4cmで内傾している。内面は回転ナデ後，中央部に不定方向の静止ナデ。約1/5を欠損。	胎土　石英・長石微粒を少々含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
6	蓋 (須)	口　径　13.1cm 器　高　4.2cm	天井部は丸く，頂部はやや平坦である丁寧な回転ヘラ削りを施している。天井部と口縁部の境の段は丸みを帯び退化している。口縁部は内傾している。内面は回転ナデ後，中央部に不定方向の静止ナデ。完形で残存。	胎土　長石微粒を少々含む 焼成　良 色調　(外)(内)淡灰色 ロクロ　右回転
7	坏 (須)	口　径　11.7cm 受部径　14.5cm 器　高　4.1cm	底は偏平で，回転ヘラ削りを施しているが，座りが悪い。立ち上がりは1.5cmで内傾している。内面は回転ナデ後，中央部に不定方向の静止ナデ。完形で残存。	胎土　石英・長石微粒を少々含む 焼成　やや軟 色調　(外)(軟)灰色 ロクロ　右回転
8	蓋 (須)	口　径　13.1cm 器　高　3.8cm	天井部は偏平で，回転ヘラ削りを施しているが整形がお粗末である。天井部と口縁部の境は，やや角のとれた沈線をめぐらせて段のような形状を作りだしている。口縁部は内傾している。内面は回転ナデ後，中央部に不定方向の静止ナデ。完形で残存。	胎土　長石微粒をわずかに含む 焼成　やや軟 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
9	坏 (須)	口　径　11.8cm 受部径　14.0cm 器　高　4.4cm	底は偏平で，回転ヘラ削りを施しているが，座りが悪い。立ち上がりは1.7cmと高く，内傾している。内面は回転ナデ後，中央部に不定方向の静止ナデ立ち上がりの付け根は，外・内面とも工具を押し当てて回転させたような鋭角の凹ラインがめぐる。完形で残存。	胎土　石英・長石微粒を少々含む 焼成　良好 色調　(外)濃灰色　(内)灰色 ロクロ　右回転

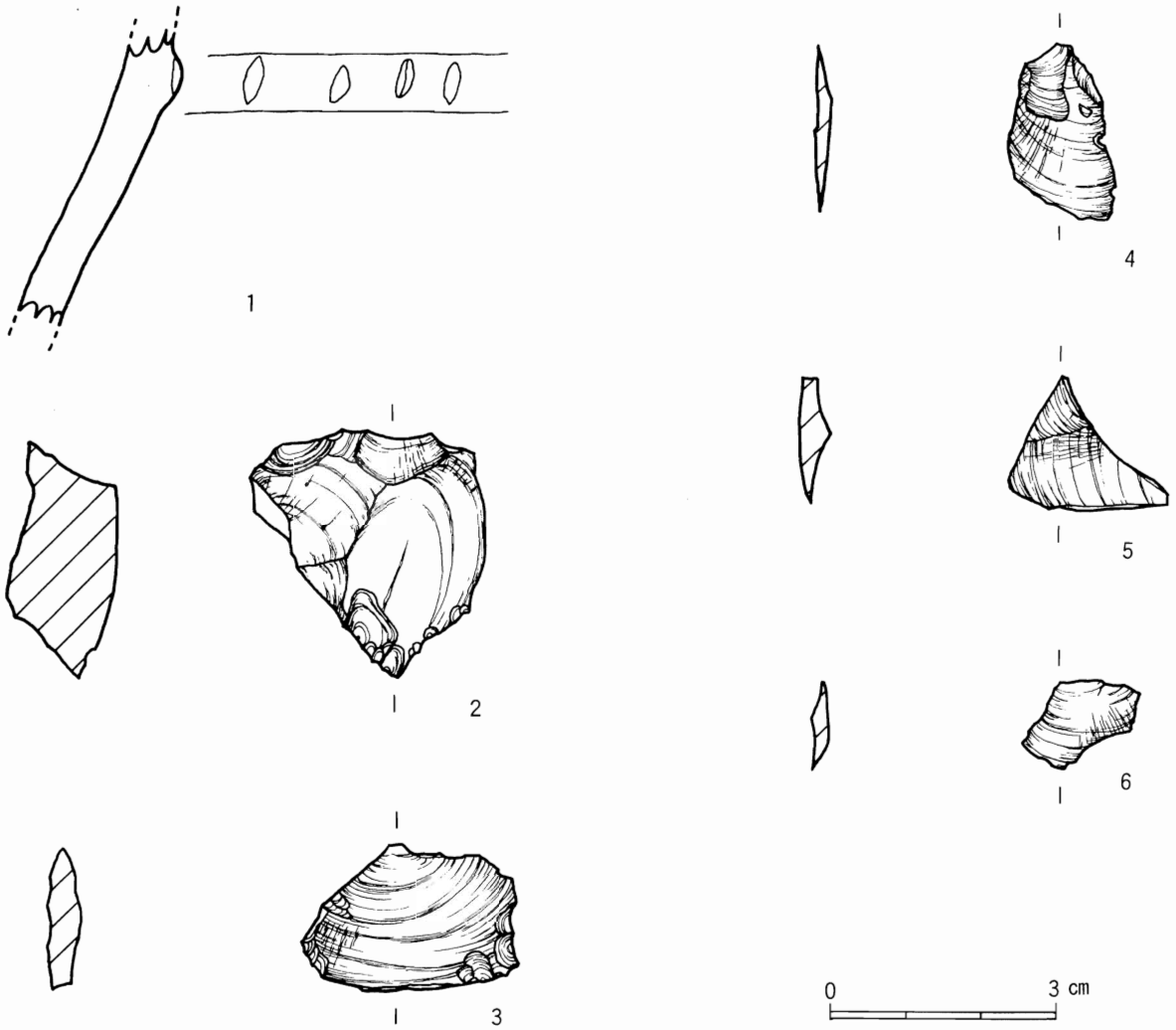
●その他の遺物

古墳とは直接的な関係がない遺物としては，主体部埋土中から磨製蛤刃石斧欠損品１点のほか，盛土内から磨製蛤刃石斧欠損品１点と縄文土器破片１点，黒耀石剝片５点が出土した。

第８図１は，主体部埋土中から出土した磨製蛤刃石斧で，刃部を欠損する。比較的細身で，断面は円形に近い。２は，盛土中から出土した磨製蛤刃石斧で，刃部のみが残る。断面は楕円形で，刃部に



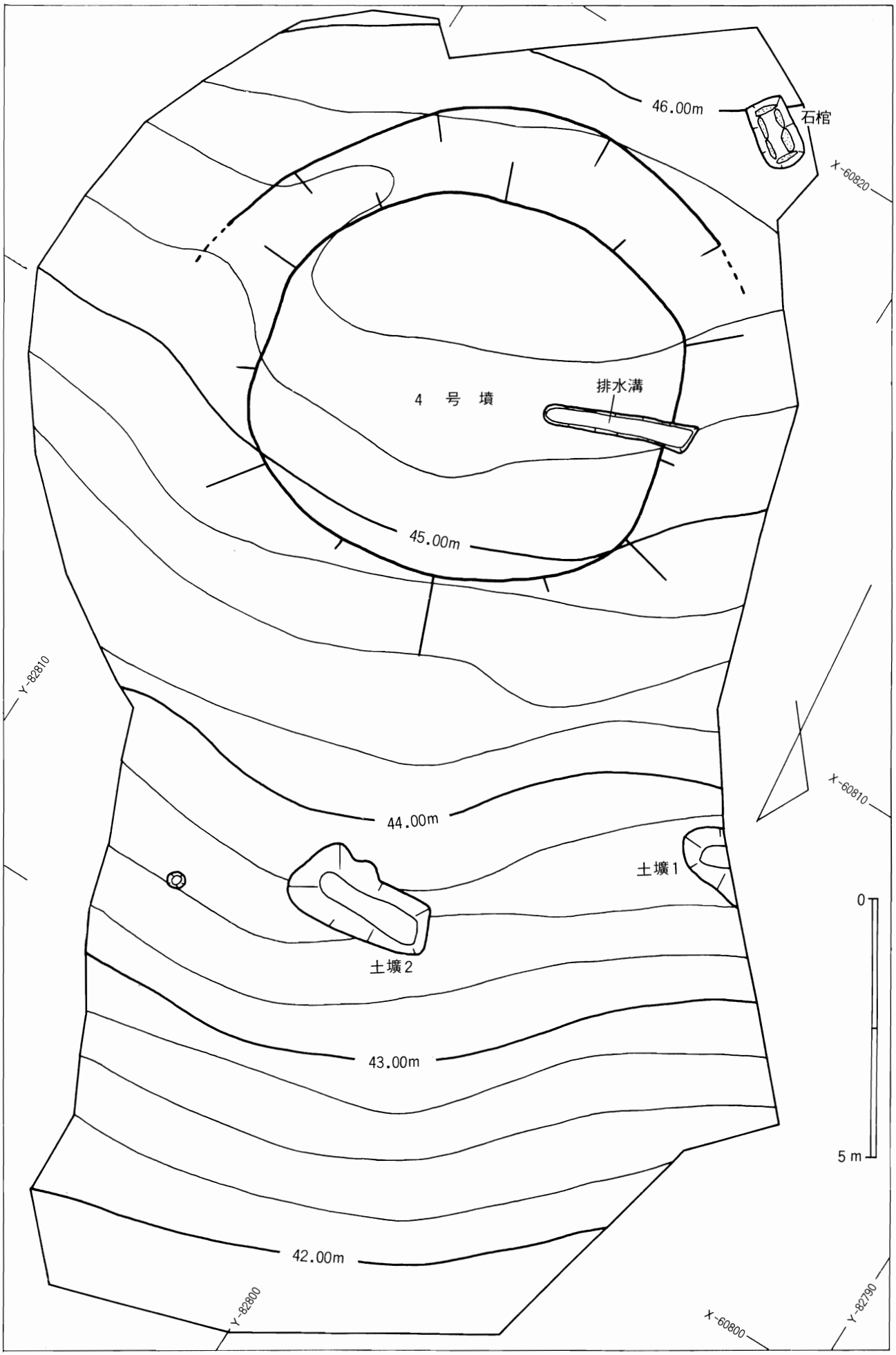
第８図　４号墳盛土内出土遺物実測図



第９図　４号墳盛土内出土遺物実測図

は使用痕が観察できる。

第９図１は，縄文土器片で深鉢の肩から下にかけての部分である。風化がいちじるしいが，刻み目突帯がわずかに観察できる。破片が小さいため，法量は不明である。２は，黒耀石の石片，３～６は剝片である。いずれも二次加工の痕跡はなかった。



第10図　完掘後地形測量図

V. 周辺の遺構について

●組み合わせ式箱形石棺（第11図）

論田４号墳から南に約２ｍ離れた，この丘陵のほぼ尾根上と呼べる標高46ｍの平坦面から検出された。小さなものである。掘り方は主軸を北西一南東にとり，内法長120cm，内法幅80cmの角丸方形で，地山下2,30cmまで掘り込んでいる。段は無い。石棺は板石に近い自然石各１枚を立てて小口石となし，北東側の側石には２枚を並べて立て，南西側の側石ではやや小さめの自然石を横積みに積み上げて形成している。掘り方との隙間には込め石がわずかであるが確認された。石材は不明であるが，この丘陵付近に自然石を産する場所がない事から，どこからか運んできたものである。石棺は内法長80cm，内法幅30cmを測る非常に小型のもので，幼児を埋葬したと思われる。

蓋石はすでに除去され，棺内は単一層の黒色土が充満していた。過去において盗掘にあったような検出状況であった。副葬品等は一切出土しなかった。したがって時期は不明である。

●土　　壙

論田４号墳の北方緩斜面，標高約44ｍの地点に不整形な土壙２基が検出された。

土壙１（第12図）

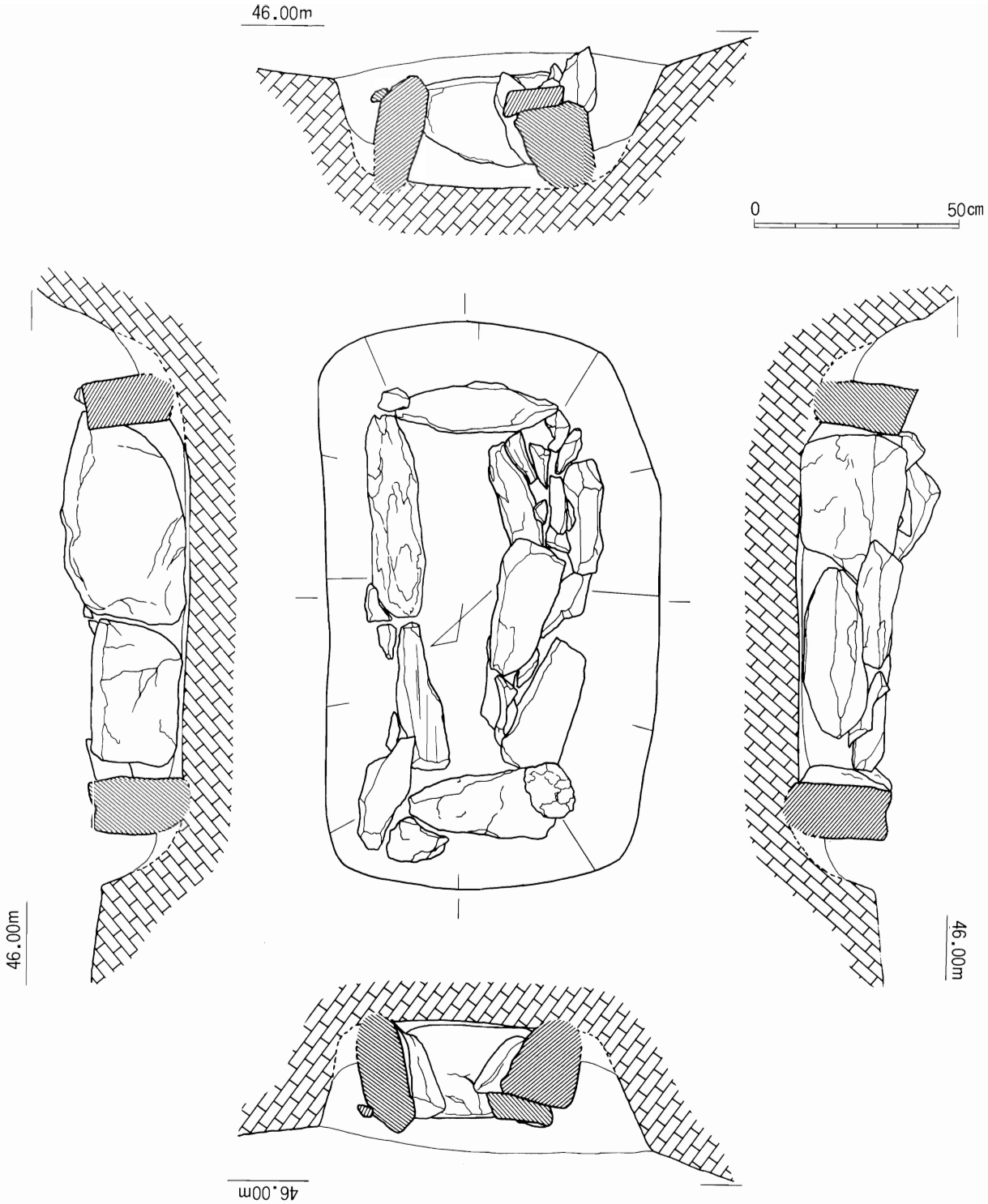
崖付近に位置して危険であるため一部しか掘れなかったが，大きさは南北約１ｍ，東西は未掘のため不明である。深さは0.8ｍ弱を測る。埋土は炭混じりの淡白褐色砂質土層一層のみで，その中からは石器２点（第14図）が出土した。第14図１は，黒耀石製で，両面から刃をつけたスクレイパー様の石器である。製作時か使用時において欠損している。２は，石材は不明であるが，淡橙色の剝片で，明らかに二次加工と見られる両面からの剝離痕が３カ所に集中して観察される。鏃の製作過程とも考えられるが，定かではない。遺構の性格は不明であるが，時期は縄文時代まで遡る可能性が高い。

土壙２（第13図）

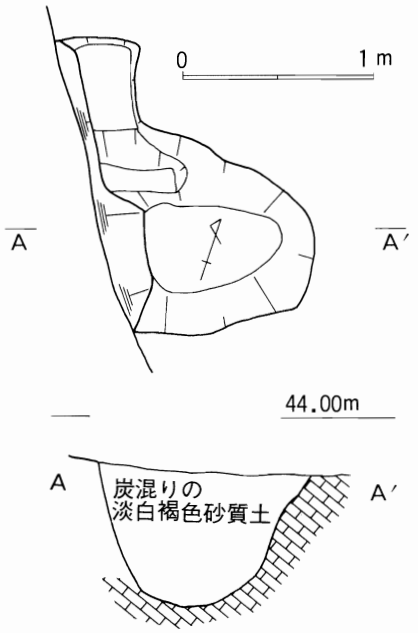
大きさは南北0.8～1.6ｍ，東西2.8ｍ，深さ約0.5ｍを測る。埋土は土壙１と同じ炭混じりの淡白褐色砂質土であった。床面近くでは大きめの炭がまとまって出土した。なんら遺物を伴わなかったが，形状・埋土とも近似していることから土壙１とほぼ同時期のものではないかと推察される。

●遺構に伴わない遺物

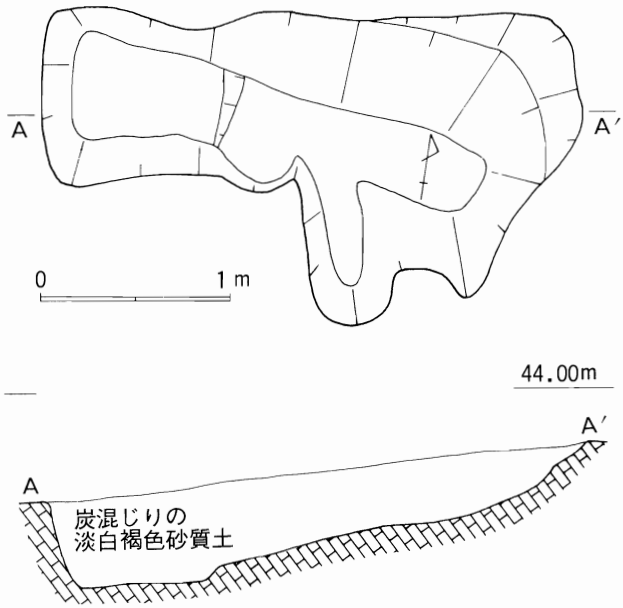
小型石棺のすぐ近くの表土直下からやや大きめの黒耀石片が出土した（第15図）。製品にはなっていない。縦3.0cm，横4.8cm，厚さ1.7cmを測る。



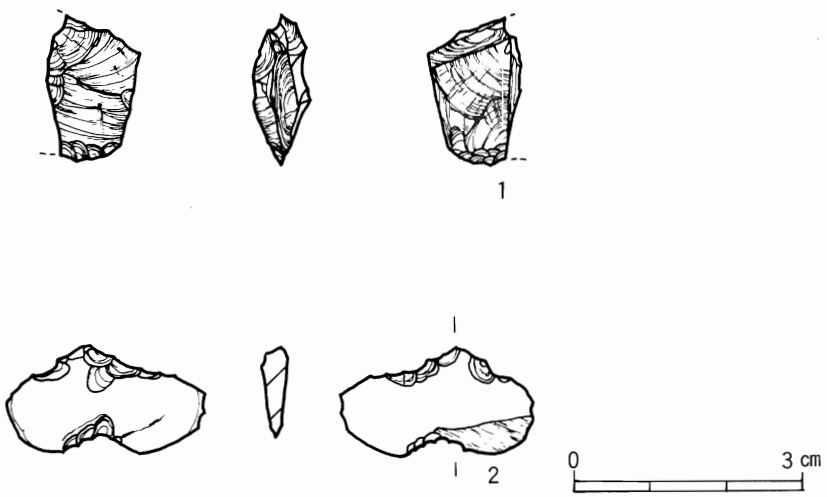
第11図　小型石棺実測図



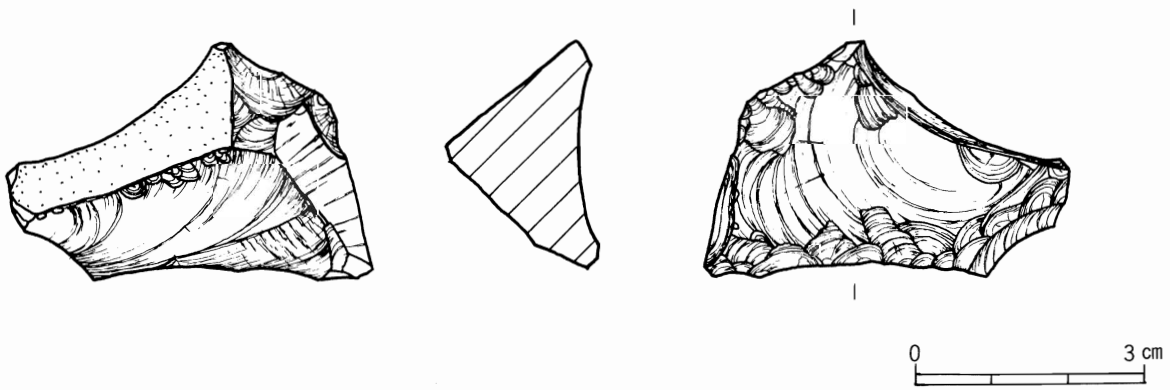
第12図　土壙１平面図およびセクション図



第13図　土壙２平面図およびセクション図



第14図　土壙２出土遺物実測図



第15図　遺構に伴わない遺物実測図

Ⅵ. 小　　結

論田４号墳は，調査の結果，古墳時代後期の比較的早い時期の小円墳であった。

墳裾が５ｍも離れずに接している論田１号墳はほぼ同規模の方墳で，約50ｍ離れた２号墳は墳形が一応方墳とされているが不明瞭で，組み合わ石棺を主体部に持つ時期不明の小古墳である。また，１号墳と２号墳の間の尾根上平坦地は昭和54年の発掘調査で古墳時代後期の溝状遺構，遺物が確認されている。数は少ないが，後期特有の小規模古墳が集合した古墳群と考えられる。しかし，後述する論田横穴群も含めると，この丘陵は，古墳時代後期を通して周辺地域の聖なる埋葬場所として利用されてきたようである。

そのような中で，論田４号墳は，少々変わった存在といえる。墳丘は径8.5ｍ前後を測る円墳で，主体部は木棺直葬であった。しかも主体部の土壙は，墳丘上面から掘りこまれた段を有さない単純掘り土壙で，規模は４×２ｍを測る不整形な方形ある。これは径8.5ｍの墳丘に対して非常に大きめの主体部である。

しかも，木棺は北西の壁に寄せて１体分が土層観察から確認されたのみで，主体部土壙内には空白の空間が大部分を占めている。

墳丘築造前に排水溝施設を設けている事から，墓壙を掘り始める以前に大まかな主体部設計図があったと考えられるが，このような主体部は現在のところ松江市近郊では他に類例を見いだせない。どこか他地域の影響を受けたものか，単に個性的なものであるのか，現時点では全く不明である。今後の調査例の増加を待って考察していきたい。

さて，４号墳墳丘盛土内から縄文時代の土器片，黒耀石剝片が検出された。調査区域を広げた際には縄文時代と考えられる土壙２基も検出された。また，昭和54年の調査の際にも１号墳と２号墳の間の平坦面から剝片石器が出土している。縄文期の遺物は流れこみなどで低地から大量に出土するケースは多いが，丘陵上から原位置をあまり動かずに出土した例はこの近辺ではほとんどみられない。今後，この丘陵について調査を実施することがあるとすれば，古墳についてのみでなく，縄文期の遺構をも念頭において調査する必要があるだろう。

（付　　編）

論田横穴群概要報告

1．位　　置

論田横穴群は，島根県松江市西津田町字論田1432－7に所在する。

論田1号墳の東側のすぐ下の斜面にあたる。この周辺は近年大きく変貌しており，筆者は当時の地形を知らないが，横穴群が位置する斜面の前面は狭い谷で水田が作られていたという。周囲も現在では中学校や道路，住宅地と化しているが，以前は低丘陵がかなり広範囲に広がっていたようである。開発によって消滅した遺跡も数多くあったであろうと推察される。

2．調査に至る経緯

論田横穴群は，松江市立第四中学校の新築工事に伴う造成用地計画の範囲内に含まれていたが，周知の遺跡ではなく，事前分布調査でも確認することができなかった。したがって計画範囲内では丘陵尾根上の論田2号墳と尾根上平坦面，論田遺跡のみが昭和54年の事前発掘調査として実施されたのみで，本横穴群については全く調査されていなかった。

昭和55年3月，造成工事がすでに開始され，重機で丘陵斜面を削平中に玄室横穴天井部が陥没し，業者から松江市教育委員会庶務課に連絡がはいり，この段階ではじめて論田横穴群の存在が確認された。そこで当時の文化財担当課であった社会教育課は位置，範囲および規模を確認するため，直ちに現地調査を開始した。

その結果，玄室の原形をとどめる横穴2穴，すでに玄室天井部分を削平されたもの2穴，玄室奥壁より3分の1程度を残すもの1穴，合計5穴を確認した。そのほか周辺の掘削土中にも多量の須恵器が散乱しており，また丘陵斜面に黒色土層が検出される事などを考え併せると，少なくとも2穴以上が完全に破壊され消滅したのではないかと当時推察されている。

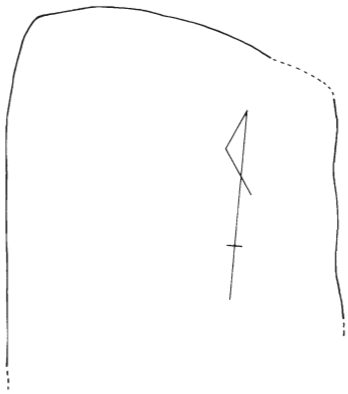
庶務課と協議の結果，すでに工事は進行中で計画変更は不可能とのことで，現状保存はあきらめ，横穴周辺の工事を部分的に遅延させ，その間に緊急発掘調査を実施し記録保存をおこなうこととなった。

3．調査の概要

調査の概要の詳細については筆者は全くわからない。5穴の横穴は上段北より1号穴，2号穴，下段北より3号穴，4号穴，5号穴と呼称している。調査期間は昭和55年3月17日から3月31日までで，土・日曜日も返上の15日間という超ハードな調査であったという。そのような調査背景のため，仕方がなかったとはいえ，絶対高を用いた遺構実測がなされていない事が非常に残念である。また，横穴配置図が紛失している。写真図版の中で注記したのでそちらを参照してほしい。

さて，今回昭和55年に実施した論田横穴群の調査成果を可能な範囲でまとめたのだが，筆者が調査を実見していないため，不明な事が非常に多い。どうかご容赦いただきたい。

論田１号穴

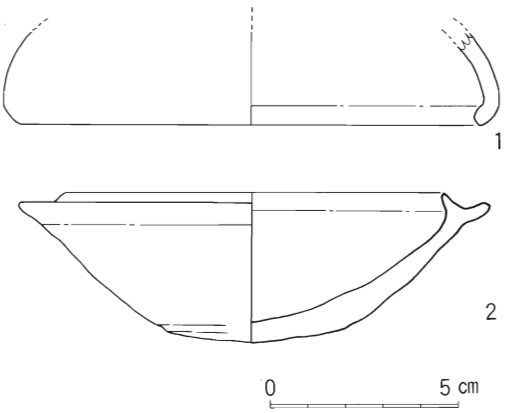


●遺　構（第１図）

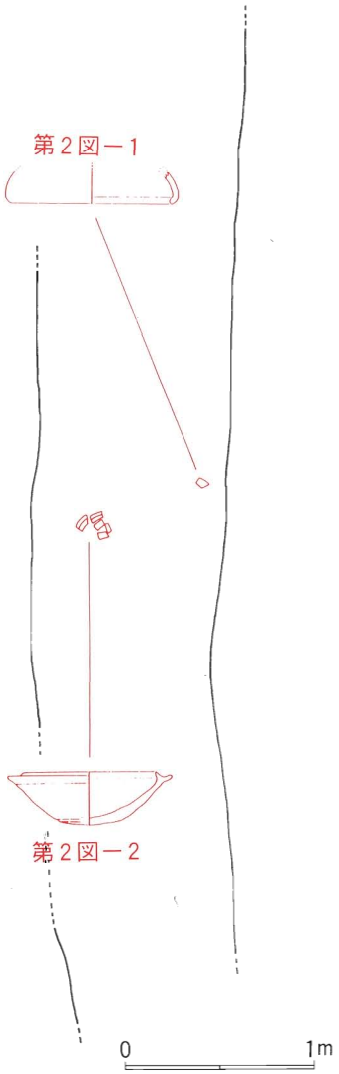
現存した５穴のうち最も破壊の跡が激しく，玄室の奥壁側の半分を残すのみで，羨道と前庭の前半部までをすでに重機によって削平されていた。残った遺構の状況から，玄室は奥行き推定２ｍ，幅1.8m，高さ推定0.9mの規模で，丸天井形式の横穴であったろうと推察される。前庭部は，幅1.05m，長さ6.5～７ｍで後半部4.5mを残すのみである。

●遺　物

出土地点がわかるものは２点のみで，いずれも前庭部分から出土している。１点は須恵器蓋で口唇が急角度で内傾するものである。もう１点は坏で，やや小型化して器壁が薄く，口縁の立ち上がりが短く内傾し，６世紀末頃のものと考えられる。出土地点は不明だが，蓋と坏が逆転した時期の受部が消えた坏も周囲の土中から出土している。



第２図　論田１号穴出土遺物実測図



第１図　論田１号穴平面図及び遺物出土状況

第１表　論田１号穴出土遺物観察表

ただしNoは、第２図に対応する
(須)は須恵器を表している

No	器種	法　量	形態・調整の特徴など	備　考
1	蓋 (須)	口　径　12.2cm ：復原	口縁端部が６cm程度しか残っておらず詳細は不明である。口縁端は回転ナデ調整で，口唇部が急角度で内傾する。	胎土　長石微粒を少々含む 焼成　やや軟 色調　(外)(内)淡灰色 ロクロ　不明
2	坏 (須)	口　径　10.0cm 受部径　12.5cm 器　高　4.0cm	全体に回転ナデ調整による整形。底部はヘラ切り。立ち上がりは短く，内傾している。約半分が残存。	胎土　石英・長石微粒をわずかに含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転

論田２号穴

●遺　構（第３図）

１号穴の南側に隣接する横穴で，前庭部の一部と玄室天井部分が削平されているが，比較的残りが良かった。横穴は，ほぼ南北を軸とし，軟砂岩層に穿たれており，南に開口している。

前庭は幅1.9～2.8m，長さ約８m強と長いもので，前方にややひらいている。中央部分は重機によって破壊されている。

羨門は幅1.1～1.2m，奥行0.5～0.8mを測る。閉塞石は認められなかった。羨道は幅1.1m，奥行は右が1.3m，左が0.8mの左右非対照形である。

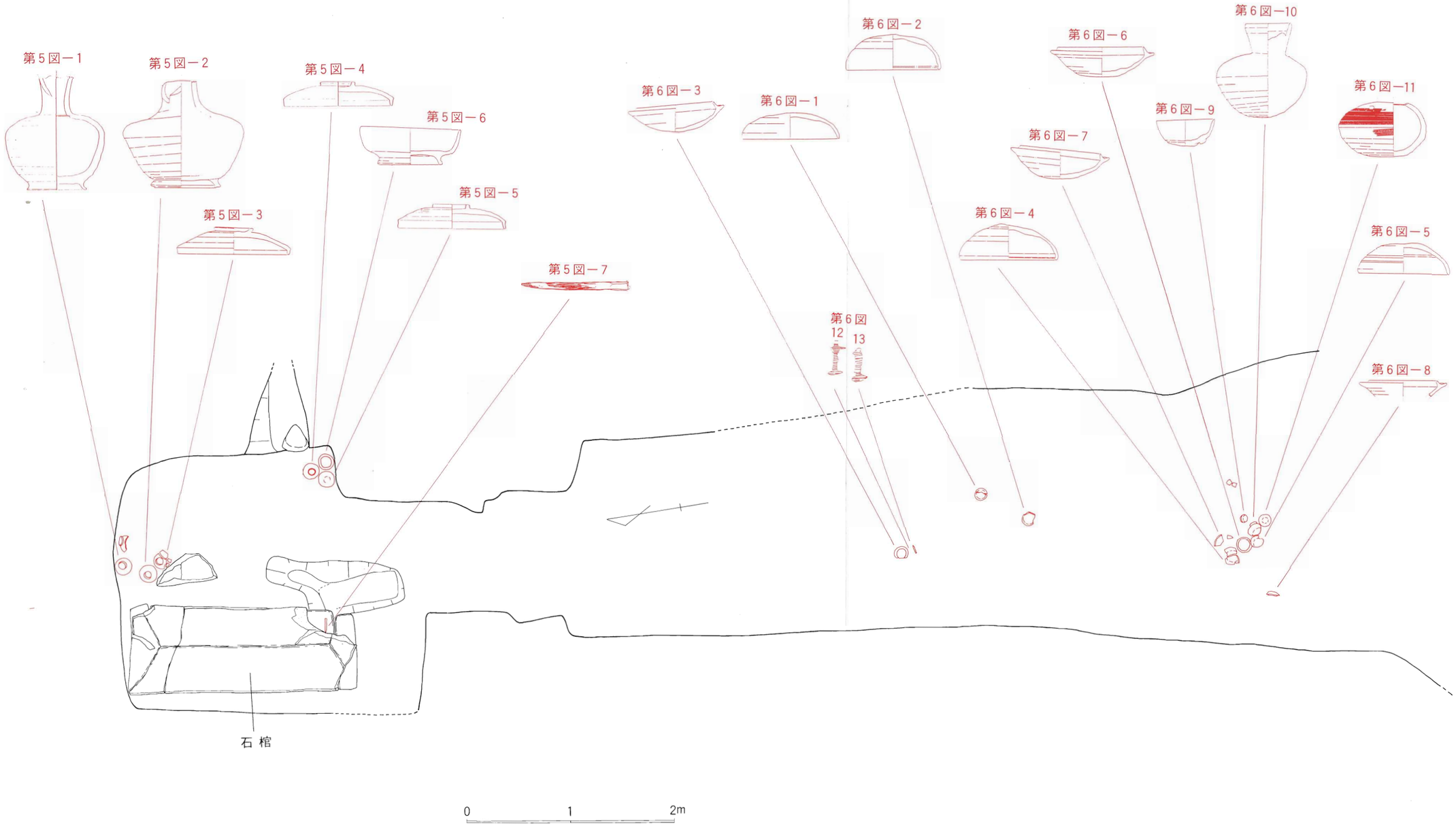
玄室長は右側奥行２m，左側2.9m，奥壁幅2.5mと不整形な長方形を呈している。玄室の形態はよくわからないが，丸天井形式であろう。玄室左側は右側より広い約１mの袖を作り出し，蓋石の長さ２m，幅0.8mを測る組み合せ横口式家形石棺（第４図）を安置している。

石棺の内法は長さ1.85m，幅0.8m高さ0.6mで，来待石製の組み合せ式石棺である。蓋石は厚さ18cmで上面を四注式家形に加工し，下面は３mm程度の面取りを施した後，15cmの縁をつけ，内側を深さ６cm刳りこんでいる。長側石は1.85m×0.77m，厚さ15cmの１枚石である。手前側の側石を省くことによって横口式石棺となしている。床石は厚さ15cmの大小長方形の平石各３個で構成され，小口石との接合部には南側で３cm，北側で1.5cmほどの作りだしがあり，小口石の刳りこみにうまくはめ込まれている。また，入り口側の床石端には約８cmの立ち上がった縁を作り出している。

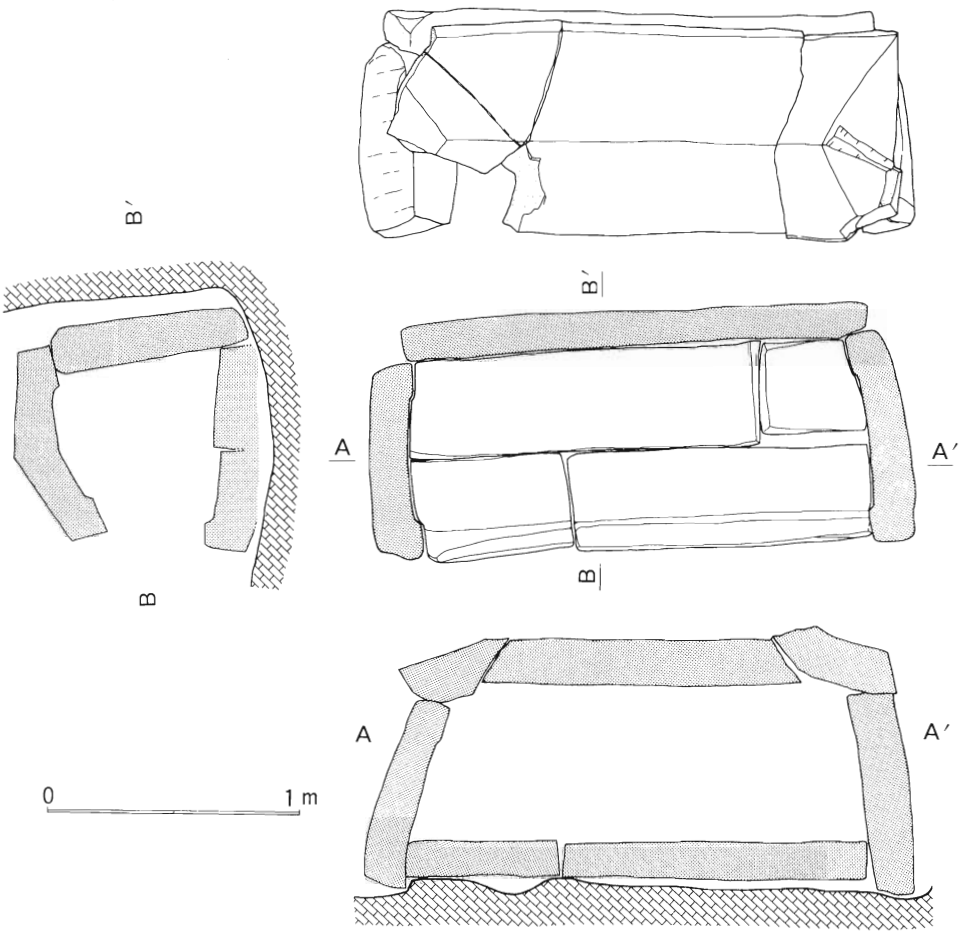
排水溝は作られていなかった。玄室の中央よりやや前方寄りには略長方形の土壙が認められたが，その意味は不明である。

●遺　物（第３，５，６，７図）

遺物の出土状況は，玄室内では中央奥壁付近に口縁部を故意に欠いた長頸壺２，輪状つまみがついた蓋１，高台のついた坏１がひとかたまりに置かれ，右袖前壁付近に輪状つまみのついた蓋２，高台のついた坏１がかためて置かれていた。いずれも須恵器で，新しい様相を呈している。とくに蓋は径の広い輪状つまみがつき，天井部はやや丸みを帯び，内面のかえりは消えて口縁端部を内側に屈曲さ



第3図　論田2号穴平面図および遺物出土状況



第4図　2号穴石棺実測図

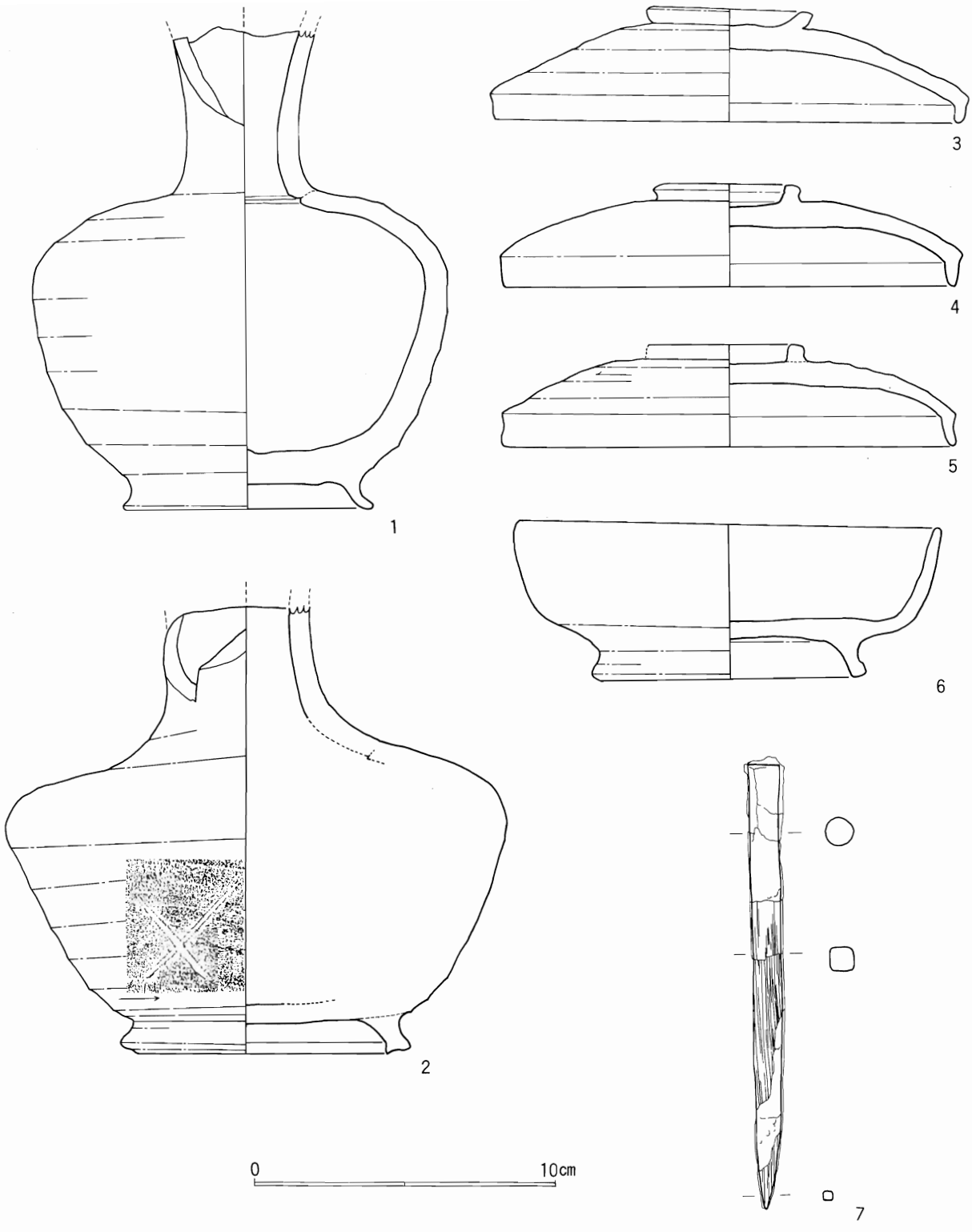
せた形式になっている。したがってこの横穴で最後に追葬がおこなわれたのは8世紀初頭と判断されるのである。

石棺内には鉄製品が唯一副葬されていたが，それが何の道具であるのかは不明である。それは一端が細く尖り，断面は径の大きい方が丸形，尖る方が方形を呈している。断面方形部分には全周に木質が付着しており，柄部分であるかもしれない。

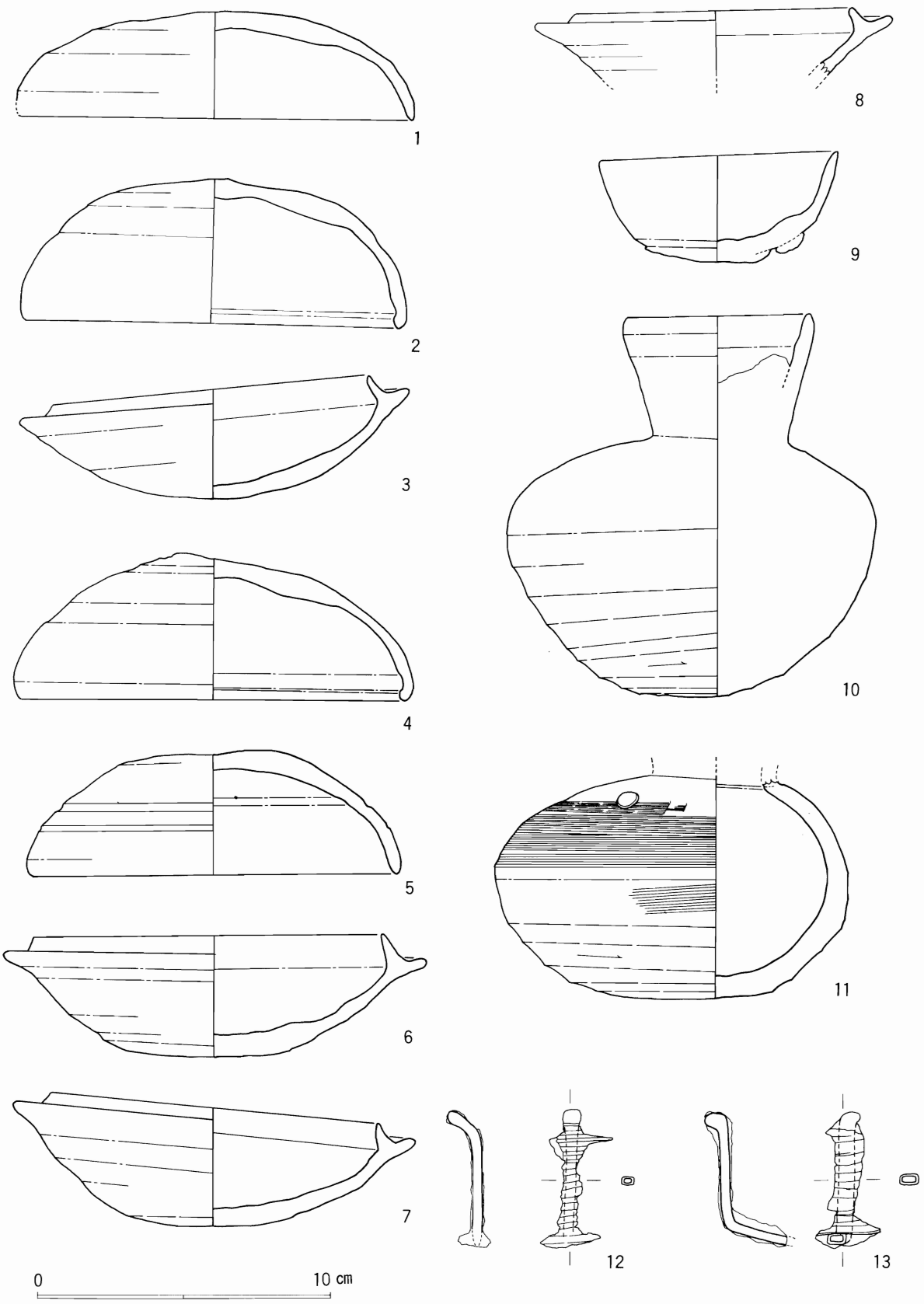
羨道部には遺物は残されていなかった。

長い前庭部には2群に分かれて遺物が出土しており，単純に考えると2回，もしくは2回以上の追葬がおこなわれたとものと思われる。羨門に近い方の1群は，いずれも約20cm程度浮いた状態で出土し，須恵器の蓋坏に混じって木棺に使用されたと思われる釘2点も出土している。もう1つの1群は前庭の入口付近の左側に寄せた位置にかためて置かれている。蓋坏のほかに平瓶も混じっておりまとまった数が出土している。1群，2群とも，蓋は天井がヘラ切りのまま無調整で，天井部と口縁部の境の段はわずかな傾斜の違い，沈線表現に変化している。また，坏も底部はヘラ切り後無調整で，立ち上がりは短く内傾している。この横穴が最初に作られた時期は，前庭に残された遺物から推察して，6世紀末であったと思われる。

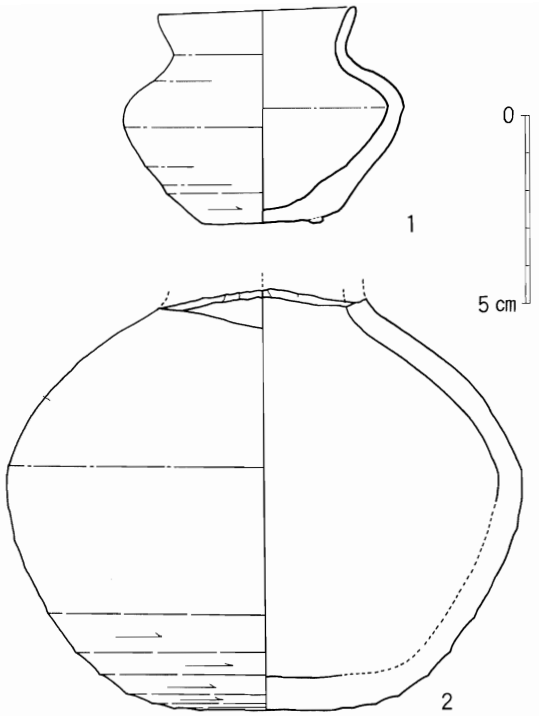
遺物個々についての説明は，次に掲げる第2・3・4表，出土遺物観察表を参照していただきたい。



第５図　２号穴出土遺物実測図（Ⅰ）



第6図　論田2号穴出土遺物実測図（Ⅱ）



第7図　2号穴出土遺物実測図
(出土位置不明のもの)

第2表　論田2号穴出土遺物観察表(Ⅰ)

No.は第5図に対応する
(須)は須恵器を表す

No.	種類	法量	形態・調整の特徴など	備考
1	長頸壺(須)	底径　8.2cm	全体に回転ナデ調整による整形。胴部下半のみは回転ヘラ削りを施した後，高台をはりつけ回転ナデにより整えている。肩部は灰かぶり。口縁部は供献全体に回転ナデ調整による整形。胴部下半のみは回転ヘラ削りを施した後，当時故意に欠いたと思われる。胴部は少々欠損するが，大部分が残存。	胎土　石英・長石粒を少々含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
2	長頸壺(須)	底径　16.6cm	全体に回転ナデ調整による整形。胴部下半のみは回転ヘラ削りを施した後，高台をはりつけ回転ナデにより整えている。底を除き，全面に灰をかぶりツヤがある。胴部下半にはヘラ記号「×」が描かれている。口縁部は供献当時故意に欠いたと思われる。頸下半以下は残存。	胎土　石英・長石粒を少々含む 焼成　良好 色調　(外)(内)淡灰色 ロクロ　右回転
3	蓋(須)	つまみ径　5.4cm 口径　15.5cm 器高　3.8cm	全体に回転ナデ調整による整形。輪状つまみをはりつけている。口縁はやや内傾している。全体の約1/4を欠損する。	胎土　長石微粒をわずかに含む 焼成　やや軟 色調　(外)(内)淡灰色 ロクロ　右回転
4	蓋(須)	つまみ径　4.9cm 口径　15.0cm 器高　3.4cm	全体に回転ナデ調整による整形。天井部は静止糸切り後，輪状つまみをはりつけ，さらに回転ナデを施して糸切り痕を消し整えている。口縁はほぼ垂直に下垂している。完形で残存。	胎土　石英・長石微粒を少々含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
5	蓋(須)	つまみ径　5.2cm 口径　15.0cm 器高　3.4cm	全体に回転ナデ調整による整形。天井部は静止糸切り後，輪状つまみをはりつけ，さらに回転ナデを施して糸切り痕を消し整えている。口縁はやや外にひらいている。つまみが約半分剝落しているが，他は残存。	胎土　石英・長石微粒を少々含む 焼成　やや軟 色調　(外)(内)灰～淡灰色 ロクロ　右回転
6	坏(須)	口径　14.0cm 底径　9.0cm 器高　5.35cm	全体に回転ナデ調整による整形。坏底部は回転糸切り痕が残るが，高台をはりつけた後，軽く回転ナデを施して整えている。	胎土　石英微粒を少々含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
7	鉄器	残存長　15.0cm 最大厚　1.0cm	鑿であろうか？　断面が四角の部分は全面に縦方向の木質が付着しているが，木質が付着していない部分は断面が円形を呈し，この先に刃部がついていた可能性が考えられる。	

第3表　論田2号穴出土遺物観察表(Ⅱ)

No.は第6図に対応する
(須)は須恵器を表す

No.	器種	法量	形態・調整の特徴など	備考
1	蓋 (須)	口径　13.5cm 器高　3.7cm	全体に回転ナデ調整による整形。内面中央部のみ不定方向の静止ナデを施している。天井部はヘラ切り。天井部と口縁部の境の段は消えている。口縁部は自然に外にひらいている。口唇を少々欠損。	胎土　長石微粒を少々含む 焼成　良 色調　(外)淡灰色(内)淡褐灰色 ロクロ　右回転
2	蓋 (須)	口径　12.2cm 器高　4.95cm	全体に回転ナデ調整による整形。内面中央部のみ不定方向の静止ナデを施している。天井部はヘラ切り。丸みを帯びたプロポーションで，天井部と口縁部の境の段は消え，わずかにナデにより境目を表現している。口縁部はやや内傾し，内面にはナデによる凹ラインがめぐらされている。口縁を半分欠損。	胎土　長石微粒を少々含む 焼成　やや軟 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
3	坏 (須)	口径　10.7cm 受部径　13.2cm	全体に回転ナデ調整による整形。内面中央部のみ不定方向の静止ナデを施している。焼成の際上下逆であったらしく，底部外面は灰かぶりで，調整は不明である。立ち上がりは内傾するが，先端部分は急に外反している。口縁部を少々欠損している。	胎土　長石微粒をわずかに含む 焼成　良 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
4	蓋 (須)	口径　13.0cm 器高　5.0cm	全体に回転ナデ調整による整形。内面中央部のみ不定方向の静止ナデを施している。天井部はヘラ切り後，ヘラの背を平行にペタペタ押し当てている。口縁部は内傾し，内面はやや肥厚し，その直上はナデによる凹ラインがめぐる。約1/5を欠損している。	胎土　石英粒をわずかに含む 焼成　やや軟 色調　(外)(内)淡褐灰色 ロクロ　右回転
5	蓋 (須)	口径　12.4cm ：復原 器高　4.25cm	全体に回転ナデ調整による整形。内面中央部のみ不定方向の静止ナデを施している。天井部はヘラ切り。天井部と口縁部の境の段は消え，2条のナデ沈線により表現されている。口縁部を約1/4残存するのみである。	胎土　長石微粒をわずかに含む 焼成　良 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
6	坏 (須)	口径　11.8cm 受部径　12.3cm 器高　4.25cm	全体に回転ナデ調整による整形。内面中央部のみ不定方向の静デを施している。底部はヘラ切り後，ヘラの背を平行にペタペタ押し当てている。立ち上がりは内傾している。完形で残存。	胎土　長石粒をわずかに含む 焼成　良 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
7	坏 (須)	口径　11.2cm 受部径　13.7cm 器高　4.6cm	全体に回転ナデ調整による整形。内面中央部のみ不定方向の静止ナデを施している。底部はヘラ切り。立ち上がりは短く，内傾している。すわりが悪く水平面上ではかたむきが著しい。完形で残存。	胎土　長石微粒を多く含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
8	坏 (須)	口径　9.4cm ：復原 受部径　12.1cm ：復原	残存部はすべて回転ナデ調整による整形。立ち上がりは短く，内傾している。口縁部付近のみ約1/3周残存。	胎土　長石微粒を多く含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
9	坏 (須)	口径　8.1cm 器高　3.85cm	小型の坏で，全体に回転ナデ調整による成形。底部は不要な粘土の癒着により，調整不明。口縁部を約1/8欠損。	胎土　石英・長石微粒をわずかに含む 焼成　良好 色調　(外)(内)淡白灰色 ロクロ　右回転
10	平瓶 (須)	口径　6.2cm 器高　13.1cm	全体に回転ナデ調整によるが，胴部下半は回転ヘラ削り調整を施している。口縁はやや外にひらく。平瓶の中では口縁の片寄りが顕著ではない。肩部の張り付けは省略している。口縁内部には自然釉の塊が詰まり，実用には困難な個体と考えられる。胴部には故意に空けたような孔がある。ほぼ完形。	胎土　石英・長石微粒を少々含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
11	平瓶 (須)		上半は回転ナデ後，カキメ調整を施し径0.8cmの円形の張り付けを2カ所に施している。胴部下半は回転ヘラ削りによる。内面は回転ナデ。口縁部はすべて欠損している。	胎土　長石粒を少々含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
12	鉄器	長さ　4.9cm 幅　0.3cm 厚さ　0.25cm	釘。 頭部はやや肥大し曲げられている。頭部より下には横方向の木質が付着している。木棺に使われた釘であろう。	
13	鉄器	長さ　4.4cm 幅　0.4～0.5cm 厚さ　0.3cm	釘。 頭部はやや肥大し，折り曲げられている。身部の上半は全面に横方向の木質が付着しているが，身部の折り曲げられたところより下部分は内側のみに横方向の木質が付着している。木棺に使われた釘であろう。	

第４表　２号穴出土遺物観察表(Ⅲ)

Noは第７図に対応する
(須)は須恵器を表す

No	種類	法量	形態・調整の特徴など	備考
1	小壺(須)	口径　5.1cm 器高　5.8cm	全体に回転ナデ調整による整形。底部はヘラ切り。完形で残存。	胎土　石英粒を少々含む 焼成　やや軟 色調　(外)(内)白灰色 ロクロ　右回転
2	長頸壺(須)		胴部上半は回転ナデ調整により，下半は回転ヘラ削りによる整形。肩部は灰かぶりで，底部内面にも灰かぶりがみられる。口縁部は故意に打ち欠かれた可能性が強い。胴部のみ残存。	胎土　石英・長石微粒を少々含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転

論田３号穴

●遺　構（第８図）

本横穴群の下段北側に位置する。工事中最初に発見された横穴で，すでに玄室の羨道側天井部分が削り取られ土砂が流入していた。主軸はほぼ南北をとる。

前庭は入り口側が削り取られて長さは不明だが，約３ｍ弱の長さが残存し，幅は2.1ｍ前後を測る。

羨門は幅1.1ｍ，奥行１ｍを測る。羨門奥側には主軸と直交する溝があり，人頭大の石が６～７個認められたことから，板とそれを固定させるための石によって閉塞していたと推察される。石の上には故意的と思われる状態で須恵器大型カメ片が数点置かれていた。羨道は幅1.1ｍで奥に向かってひらいている。長さは１ｍ弱である。

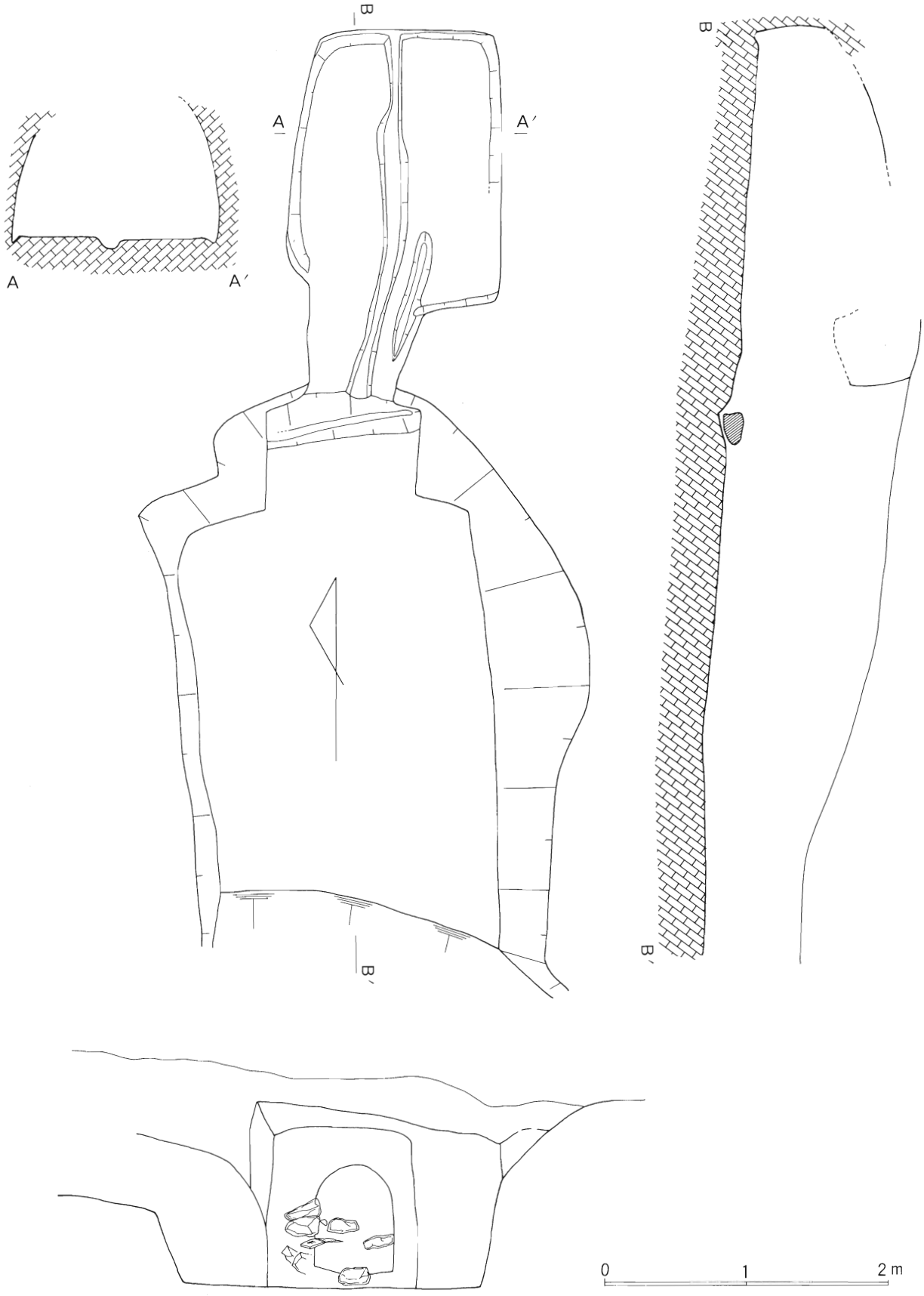
玄室は左袖が小さい，幅1.5m，奥行２ｍの丸天井に近い四注式家形天井である。床面には奥壁，側壁に沿って玄室内をほぼ１周する排水溝を掘り，さらに中央にも羨道部まで延び，閉塞部分で終結する幅15cm，深さ５cmの溝を掘っている。

●遺　物（第９・10・11図）

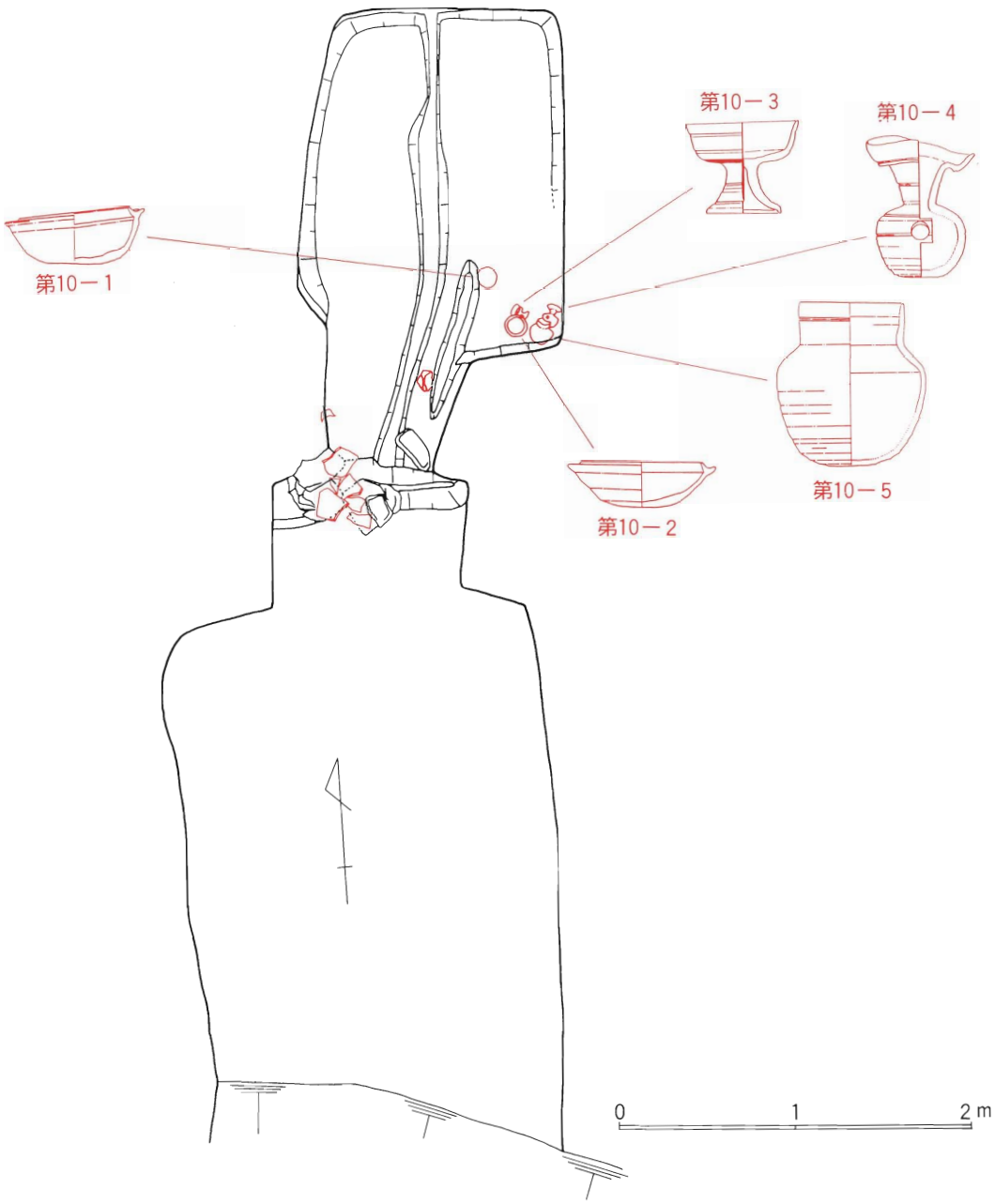
遺物は，玄室内右袖前壁側から蓋坏各１，高坏１，坩１，瑞１が出土した。坏は立ち上がりが短く，底はヘラ切り調整による。高坏は小型でシャープな作りをしており，透かしは２カ所のヘラ描き沈線で表現されている。瑞は櫛状工具刺突文は消えているが，各所のヘラ描き沈線は残りそこにやや古い様相が見いだされる。これらの須恵器の特徴から，この横穴の最後の追葬は６世紀末～７世紀初頭であったと考えられる。

出土位置不明の遺物は７点あるが，いずれも玄室内から出土した遺物と似かよった形式である。ただ，瑞（第11図６）は沈線が１条しかなくなり，口縁が頸からラッパ状にひらいて口縁帯が明瞭でなくなっている面により新しい様相が感じられる。なお，孔の周囲には焼成後の剝離が観察される。出土地点が不明であるためはっきりした事はいえないが，横穴の性格から考えて追葬がおこなわれた可能性は高いにしても，これらの土器は墓前祭祀で供献された可能性が高い。

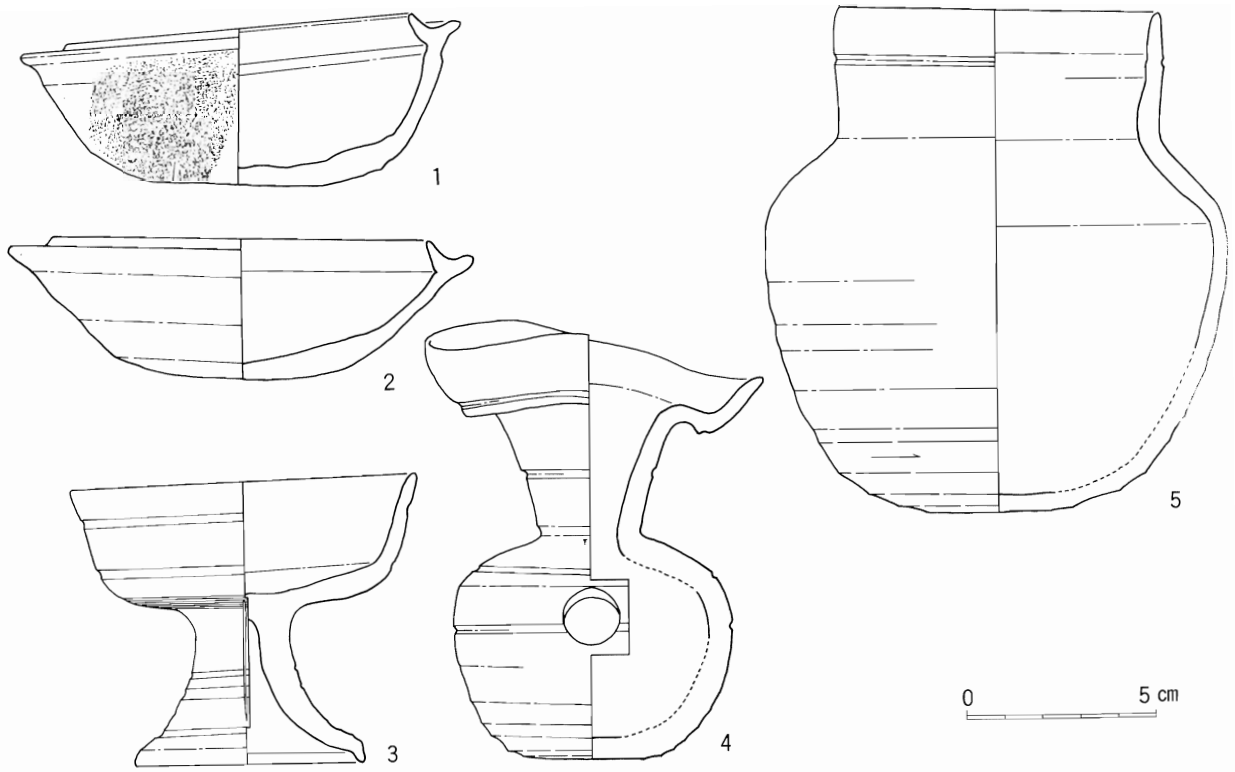
個別の詳細は第５・６表，出土遺物観察表を参照されたい。



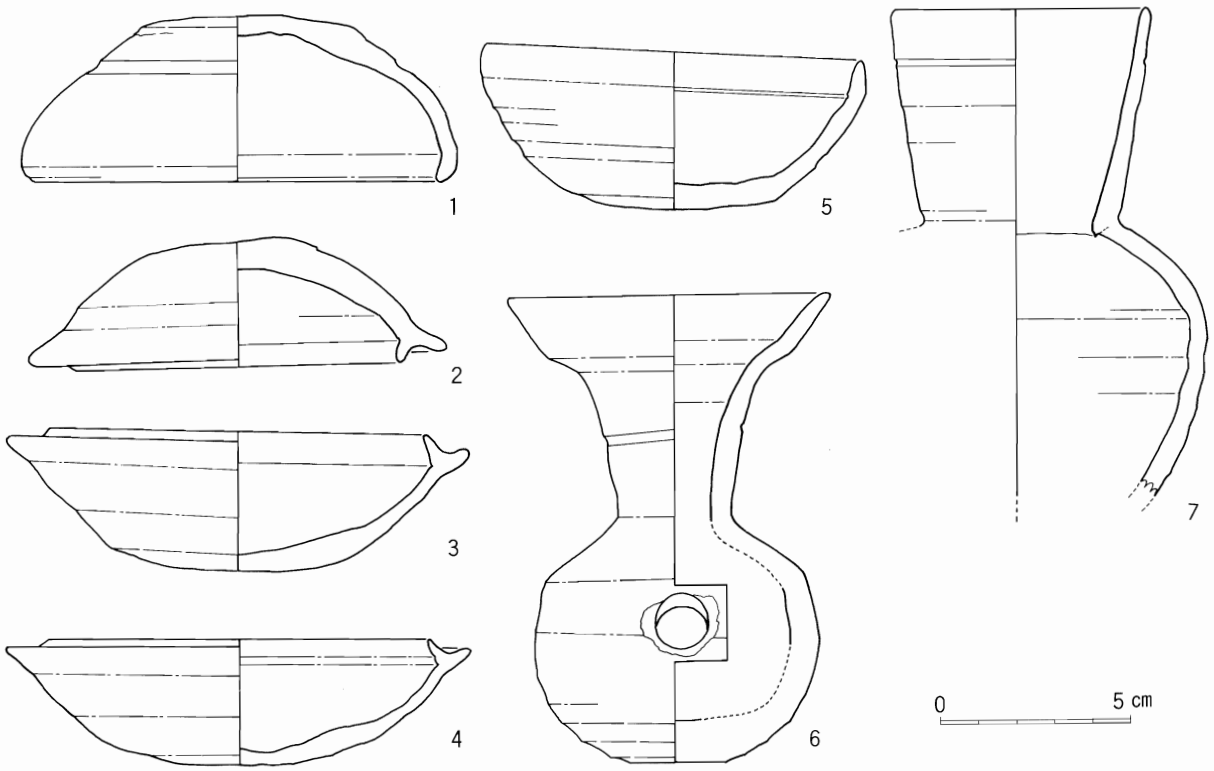
第 8 図　論田 3 号穴



第9図　論田3号穴



第10図　論田３号穴出土遺物実測図（Ⅰ）



第11図　３号穴出土遺物実測図（Ⅱ）
（出土位置不明のもの）

第5表　論田3号穴出土遺物観察表(Ⅰ)

No.は第10図に対応する
(須)は須恵器を表す

No.	種類	法量	形態・調整の特徴など	備考
1	坏(須)	口径 9.0cm 受部径 11.6cm 器高 4.6cm	外・内面とも回転ナデ調整による整形。底部外面はヘラ切り。立ち上がりは短く内傾している。外面にヘラ記号，斜めの3本線あり。完形で残存。	胎土　長石微粒を多く含む 焼成　やや軟 色調　(外)(内)淡灰色 ロクロ　右回転
2	坏(須)	口径 10.0cm 受部径 12.3cm 器高 3.3cm	外・内面とも回転ナデ調整による整形。底部外面はヘラ切り。立ち上がりは短く内傾し，内面中央部よりやや下に凹ラインがめぐる。完形で残存。	胎土　石英・長石微粒を多く含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
3	高坏(須)	口径 9.1cm 底径 6.0cm 器高 7.7cm	小型の高坏である。全体に回転ナデ調整によるが，坏部底外面にはカキメ調整が施されている。坏部に2条，脚部に3条ナデ沈線がめぐる。透かしは完全に退化し，ヘラ描きの縦方向沈線が2カ所に描かれている。完形で残存。	胎土　長石微粒を多く含む 焼成　良 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
4	甕(須)	口径 8.9cm 器高 11.8cm	全体に回転ナデ調整によるが，胴部下半は回転ヘラ削りを施している。口縁部は焼きひずみが著しいが，胴部・底は安定して座りがよい。胴部ヘラ描き沈線のあいだのハケ状工具刺突文は無い。完形で残存。	胎土　長石微粒を多く含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰～濃灰色 ロクロ　右回転
5	坩(須)	口径 8.4cm 器高 13.5cm	全体に回転ナデ調整によるが，底部外面は回転ヘラ削りを施している。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり，外面中央よりやや上部にヘラ描き沈線を1条めぐらせている。口縁部を少々欠損している。	胎土　長石微粒を多く含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転

第6表　論田3号穴出土遺物観察表(Ⅱ)

No.は第11図に対応する
(須)は須恵器を表す

No.	種類	法量	形態・調整の特徴など	備考
1	蓋(須)	口径 10.7cm 器高 4.45cm	外・内とも回転ナデ調整による整形。天井部はヘラ切り。底部と口縁部の境の段はなく，わずかにそれを意識したと思われるナデ沈線が1条めぐる。口縁部は内傾し，外面にはヘラ記号「×」を描いている。羨道部から出土。完形で残存。	胎土　長石微粒を多く含む 焼成　やや軟 色調　(外)灰色 (内)淡白褐色 ロクロ　右回転
2	蓋(須)	口径 10.5cm かえり径 8.2cm 器高 3.5cm	外面は厚い灰かぶりのため調整の観察不可能。おそらく外・内面とも回転ナデ調整によると思われる。内面は回転ナデ後，中央部に不定方向の静止ナデを施している。全体に器壁が厚い。口唇を少々欠くがほぼ完形で残存。	胎土や石英・長石微粒を多く含む 焼成　やや軟 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
3	坏(須)			
4	坏(須)	口径 10.0cm 受部径 12.3cm 器高 3.3cm	外・内面とも回転ナデ調整による整形。底は丸く，ヘラ切り。立ち上がりは極短く内傾し，内面の中央部よりやや下部にはナデにより凹ラインがめぐる。完形で残存。	胎土　石英・長石微粒を多く含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
5	蓋(須)	口径 10.0cm 器高 4.4cm	図面上では坏に表現したが蓋にみてほしい。全体に回転ナデ調整による整形。天井部はヘラ切り。外面には，ナデ沈線を意識したようなやや入りきんだナデが1条めぐる。内面は口唇下1cmのところにヘラ描き沈線が沈線が1条めぐる。口唇を少々欠損するが，ほぼ完形で残存。	胎土　石英・長石微粒を多く含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
6	甕(須)	口径 13.5cm 器高 12.45cm	全体に回転ナデ調整によるが，底のみ回転ヘラ削り。形状の退化が著しく，口縁部はだらりとラッパ状にひらき，中央部にわずかにナデ沈線が1条めぐる。胴部は沈線さえも表現されていない。孔の周辺には焼成後の剝離がみられる。玄室直上埋土中より出土した。完形で残存。	胎土　石英・長石微粒を多く含む 焼成　良好 色調　(外)(内)淡灰色 ロクロ　右回転
7	平瓶(須)	口径 6.8cm	全体に回転ナデによる調整だが，底部は回転ヘラ削りを施している。口縁はやや外傾し，口唇の少し下には1条のナデ沈線がめぐる。口縁と胴部のつなぎ目は雑で段がついている。口縁はすべて残存するが，底部と張り出す側の胴部を欠損する。	胎土　石英・長石微粒を多く含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転

論田４号穴

●**遺　構**（第12図）

３号穴の南側，下段中央に位置する。主軸はほぼ南北にとる。

前庭は前半分を重機により削平されているが，あまりラッパ様にひらかないもののようである。幅は1.2m前後を測る。

羨門は比較的奥行があり，入り口幅0.9m，奥幅1.1m，奥行0.8mを測る。羨門は閉塞部分でやや幅が広くなり，そこには主軸と直交する溝があり，その上からは人頭大の石が10個程度検出された。板を利用した閉塞で，石によって固定させたものと思われる。

羨道は，羨門から測ると長さ0.9m，幅1.85mを測る。中央には玄室から続く排水溝が１条走っている。

玄室は奥行2.5m，幅2.5m，高さ推定1.5m前後を測り，ほぼ正方形の整った作りである。おそらく丸天井であったと思われる。中央には羨道から続く，幅20cm，深さ５cmの排水溝が走り，羨道より80cmのところから奥壁の手前20cmまで，さらに５cm深く掘り下げ２段の溝となしている。右袖側では奥壁沿いと前壁沿いに排水溝が続き，いずれも側壁に至って消えている。左袖側では周囲の壁に沿って全周排水溝がめぐり，屍床を浮き上がらせている。

左袖側はいわゆる須恵器床で，大甕の破片を敷いている。玄室の中でみられる最も古いタイプの須恵器の下にも敷かれている事より初葬の時からあったものと思われる。破片は10cm前後のものが多く，敷き方はあまり密ではなく，奥壁に行くほどさらに疎らになっている。羨道側の須恵器床の上から耳環や歯骨が検出され，屍は南側に頭を向けて安置されていたことが判明した。

右袖側は，奥壁の近くに須恵器甕片が少々検出されたが，特に何らかの施設を構成するものとは思われない。

●**遺　物**（第13，14，15図）

遺物の出土状況は，羨門のすぐ手前の前庭左側に30cm程度浮いた位置から小型の蓋坏２セットが出土した。角に供献された事が幸いしてか，原位置をあまり動いていない出土状況のようである。蓋はかえりを持ち，坏は受部が消える，時代的には７世紀前半後葉に位置づけられるタイプである。玄室内には同時期の遺物が見られない事から，追葬時ではない墓前祭祀の際に供献された可能性が考えられる。また，追葬をしても玄室内に副葬品を供献せずに，前庭に副葬品を供献するような葬制の変化がおこった事も考えられる。

前庭右側からは前記と同時期のかえりを持った蓋，そして少し時期を遡る受部を持った坏が出土した。須恵器床に用いられた大甕の破片少々も出土した。

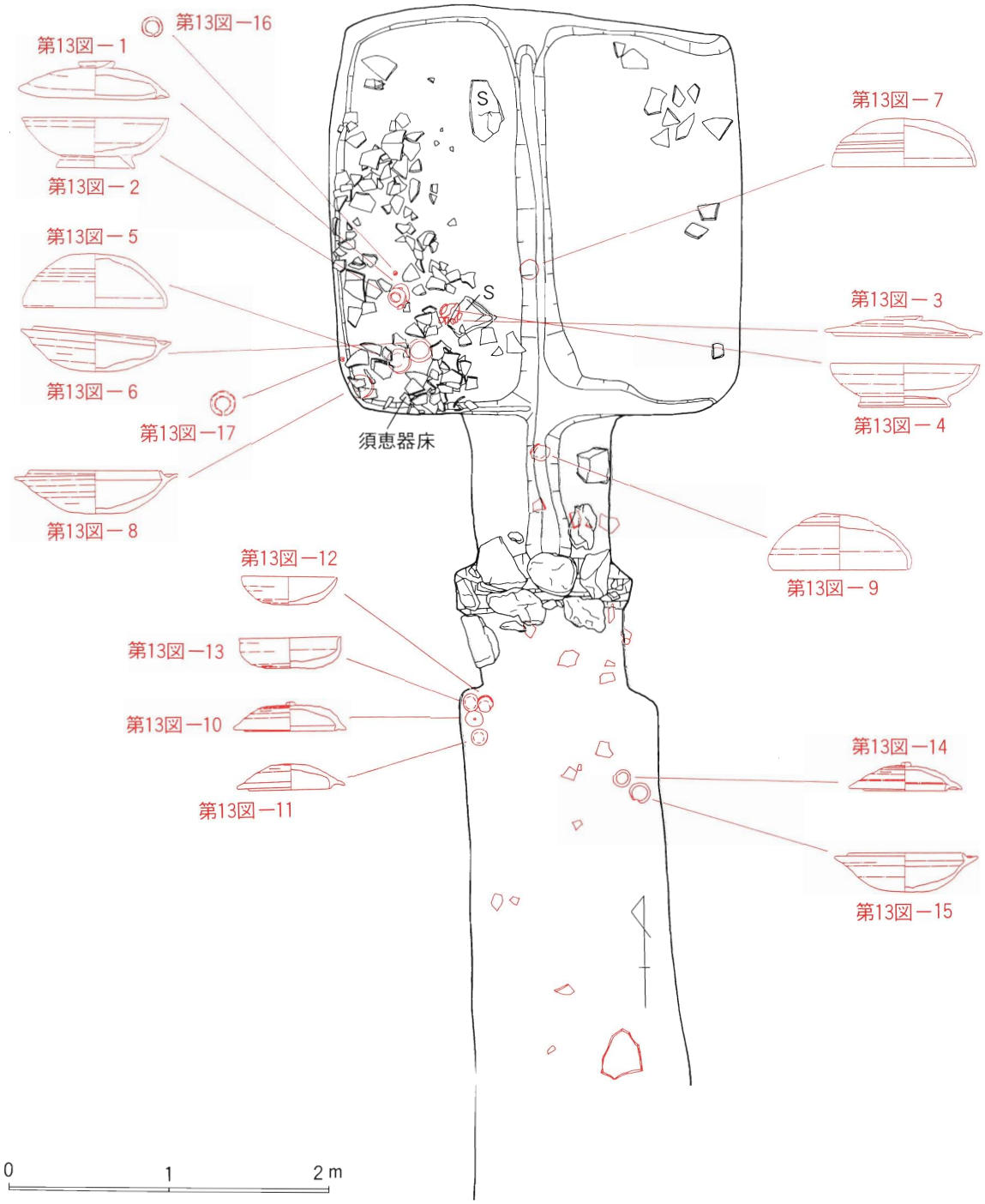
玄室内では，須恵器床の前壁によせた位置から蓋１，坏２点が出土した。これらは天井部と口縁部の境の段こそは消えているが，受部を持つ坏とセットになっている。他の出土土器と考え合わせると，

この横穴から出土した土器の中では最も古い，おそらく初葬時に副葬されたものと考えられる。さて，これらの３個体よりやや中央よりに蓋坏が重ねられた状態で２セット出土した。いずれも蓋には申し訳程度のかえりがつき，天井部には輪状つまみがつくものである。坏は底に高台がついている。出土状況，形式からみて最後の追葬時に副葬されたものであろう。

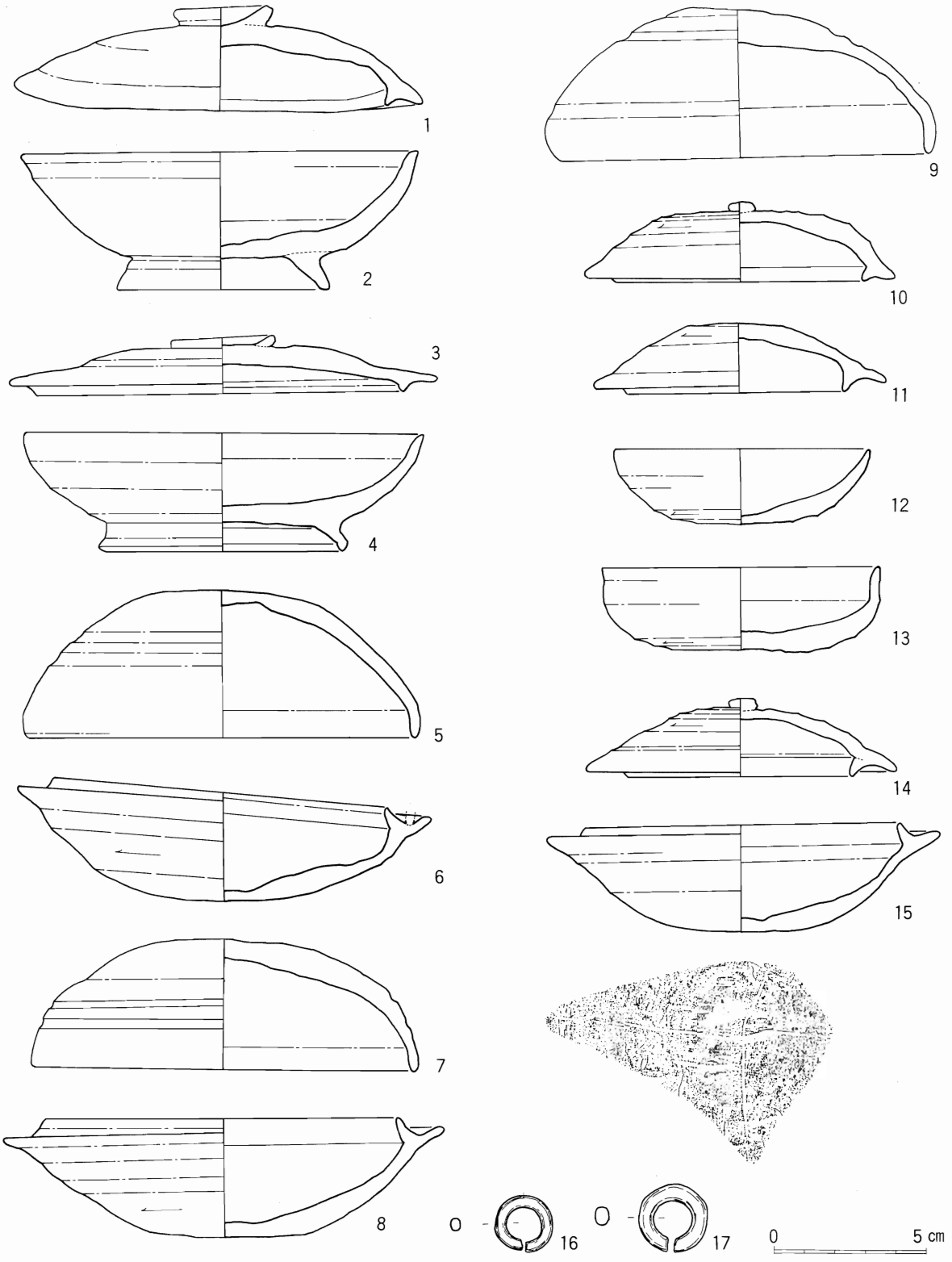
中央の排水溝からは古いタイプの蓋２点が出土したが，原位置ではない。

以上，出土遺物について説明してきたが，この横穴からは須恵器の器種は大甕片を除けば蓋坏しか出土しなかった（重機で削り取られた前庭にあったかもしれないが)。６世紀末から７世紀半ばまで，時代を追って形式の変化する蓋坏が良好な状態で出土したという意味では非常に興味深い史料といえる。

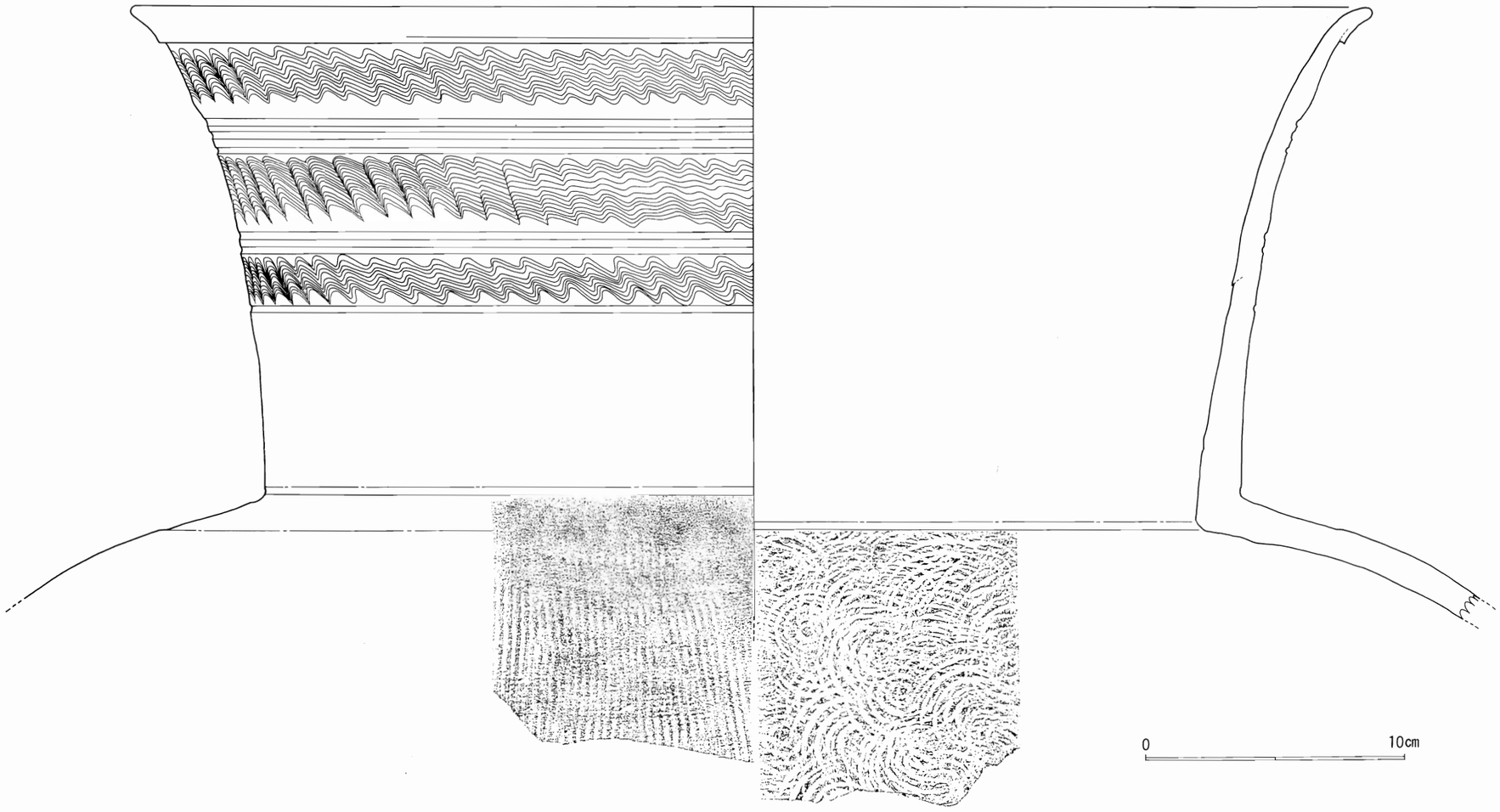
ところで，左袖側には違時期の須恵器が前壁寄りに所せましと置かれているのに対し，右袖側の屍床には広々とした空白がある。この対称が何を意味するのかまた興味深いところである。



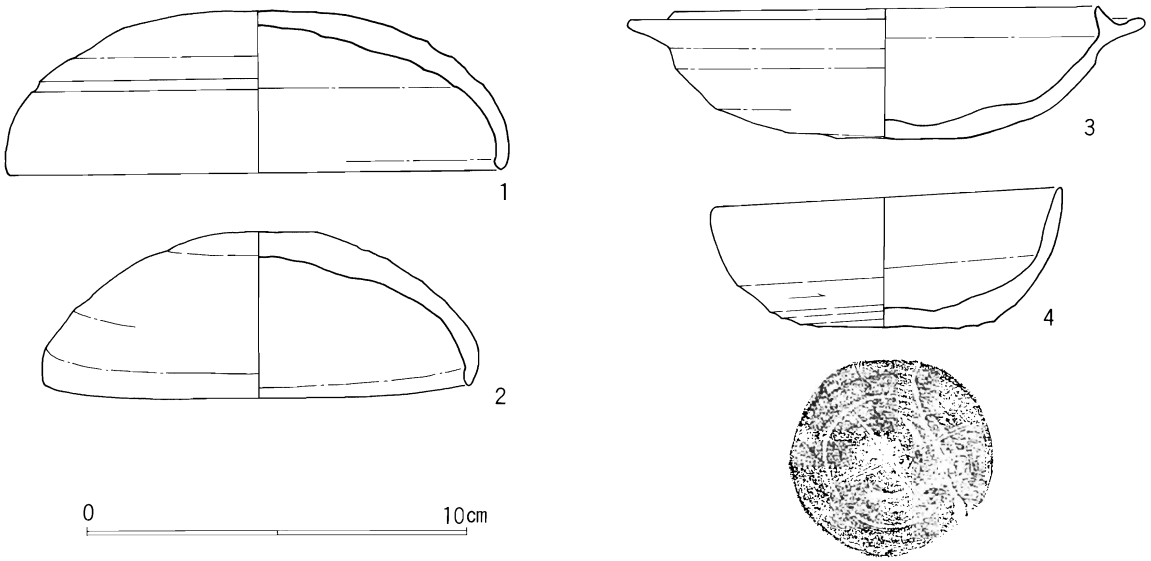
第12図　4号穴平面図および遺物出土状況



第13図　論田４号穴出土遺物実測図（Ⅰ）



第14図　須恵器床の大甕実測図（Ⅱ）



第15図　4号穴出土遺物実測図（Ⅲ）(出土位置不明のもの)

第7表　論田4号穴出土遺物観察表(Ⅰ)

No.は第13図に対応する
(須)は須恵器を表す

No.	種類	法量	形態・調整の特徴など	備考
1	蓋 (須)	つまみ径　3.25cm かえり径　11.2cm 口径　13.4cm 器高　3.5cm	全体に回転ナデ調整による整形。内面中央部は回転ナデ後，不定方向の静止ナデを施している。天井部には輪状つまみを張りつけている。内面のかえりはやや内傾する。焼き歪みが著しい。完形で残存。	胎土　石英・長石微粒を多く含む 焼成　良好 色調　(外)(内)濃灰色 ロクロ　右回転
2	坏 (須)	口径　13cm 底径　7cm 器高　4.6cm	全体に回転ナデ調整による整形。口縁は自然に外へひらく。外面全面が灰かぶりで，焼成の際上下逆転の位置であったらしい。完形で残存。	胎土　石英・長石微粒を多く含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
3	蓋 (須)	つまみ径　3.45cm かえり径　12.0cm 口径　14.0cm 器高　1.9cm	全体に回転ナデ調整による整形。天井部には輪状つまみを張りつけている。器形は丸みが無く円盤状を呈している。かえりは非常に短く，垂直に張りつけられている。外面は全面に灰かぶりである。完形で残存。	胎土　大きめの長石粒を少々含む 焼成　良好 色調　(外)(内)淡灰色 ロクロ　右回転
4	坏 (須)	口径　13.1cm 底径　7.2cm 器高　3.9cm	全体に回転ナデ調整による整形。内面は非常に滑らかに仕上げられている。口縁端を6cm程度欠損する。	胎土　石英･長石粒を密に含む 焼成　良好 色調　(外)黒灰色　(内)淡灰色 ロクロ　不明
5	蓋 (須)	口径　13cm 器高　4.9cm	天井部は風化が著しく不明だが，全体に回転ナデ調整による整形。器高が高く丸みを帯びた器形である。天井部と口縁部の境は全く消え去り滑らかである。口縁ほぼやや垂直に下がる。完形で残存。	胎土　長石微粒を少々含む 焼成　やや軟 色調　(外)(内)淡灰色 ロクロ　右回転
6	坏 (須)	口径　11.0cm 受部径　13.6cm 器高　4.1cm	全体に回転ナデ調整による整形。底も丁寧にナデている。立ち上がりは短く内傾している。焼成の際，蓋をかぶせて焼いたらしく受部に蓋の口縁部分が一部癒着している。受部の一部を欠くが，ほぼ完形で残存。	胎土　1㎜弱の石英粒を多く含む 焼成　良好 色調　(外)(内)淡灰色 ロクロ　右回転
7	蓋 (須)	口径　12.5cm 器高　4.3cm	全体に回転ナデ調整による整形。天井部は灰かぶりのため観察不可能。天井部と口縁部の境の段は消え，2条のナデ沈線によって表現されている。口縁部は垂直に下がる。口縁端をわずかに欠くがほぼ完形で残存。	胎土　石英粒を多く含む 焼成　良 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
8	坏 (須)	口径　11.6cm 受部径　14.4cm 器高　3.9cm	全体に回転ナデ調整による整形。内面中央部は回転ナデ後，不定方向の静止ナデを施している。底部はヘラ切り。立ち上がりは短く内傾する。受部の外側の全周は灰かぶりで，焼成時に蓋を重ねて焼いたと思われる。完形で残存。	胎土　1㎜弱の石英・長石微粒を少々含む 焼成　良好 色調　(外)(内)淡灰色 ロクロ　左回転

No	種類	法　量	形態・調整の特徴など	備　考
9	蓋 (須)	口　径　12.0cm 器　高　5.0cm	全体に回転ナデ調整による整形。内面中央部は回転ナデ後，不定方向の静止ナデを施している。天井部はヘラ切り。天井部に近い高い位置に深めのナデ縁部はやや内傾する。口縁を約1/2欠損している。	胎土　長石微粒をわずかに含む 焼成　やや軟 色調　(外)(内)淡灰色 ロクロ　右回転
10	蓋 (須)	つまみ径　0.95cm かえり径　8.1cm 口　径　10.2cm 器　高　2.65	外面は口縁部のみ回転ナデで，他は回転ヘラ削りを施し，中央部には小さな背が低い円形つまみを張りつけている。内面は回転ナデ調整による。器壁は厚めで，かえりは極短く内傾している。完形で残存。	胎土　石英・長石粒を多く含む 焼成　良好 色調　(外)灰色 (内)淡灰色 ロクロ　右回転
11	蓋 (須)	かえり径　7.1cm 口　径　9.6cm 器　高　2.3cm	天井部のみ回転ヘラ削リ調整で，ほかは回転なでナデ調整による整形。かえりは極短くほぼ垂直に下垂する。完形で残存。	胎土　石英・長石粒を多く含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
12	坏 (須)	口　径　8.45cm 器　高　2.5cm	全体に回転ナデ調整による整形で，底は回転ヘラ削りを施している。口唇を少々欠くが，ほぼ完形で残存。	胎土　長石粒を少々含む 焼成　やや軟 色調　(外)(内)淡灰色 ロクロ　右回転
13	坏 (須)	口　径　9.0cm 器　高　2.8cm	全体に回転ナデ調整による整形で，底は回転ヘラ削りを施している。口縁部はまっすぐ上に立ち上がっている。完形で残存。	胎土　長石粒を少々含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
14	蓋 (須)	つまみ径 0.95cm かえり径 7.4cm 口　径　10.2cm 器　高　2.6cm	天井部のみ回転ヘラ削り調整で，ほかは回転ナデ調整による整形。天井部中央には背の低い円形つまみを張りつけている。かえりは比較的長く内傾している。完形で残存。	胎土　石英・長石微粒を多く含む 焼成　良好 色調　(外)灰色 (内)淡灰色 ロクロ　右回転
15	坏 (須)	口　径　10.3cm 受部径　12.9cm 器　高　3.6cm	全体に回転ナデ調整による整形。底部はヘラ切り後，ヘラ記号「×」を描いている。立ち上がりは短く内傾している。完形で残存。	胎土　長石微粒を多く含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰～淡灰色 ロクロ　右回転
16	耳環	外径　1.85×1.9cm 内径　1.15×1.15cm 断面　0.35×0.4cm	青銅の芯に鍍金がほんのわずかに残る。	
17	耳環	外径　2.25×2.25cm 内径　1.25×1.25cm 断面　0.5×0.6cm	青銅の芯のみ残存。表面はすべて剝離している。	

第8表　4号穴出土遺物観察表(Ⅱ)

No は第14図に対応する
(須)は須恵器を表す

No	種類	法　量	形態・調整の特徴など	備　考
	甕 (須)	口　径　46.6cm ：復原	大　である。口唇は折り曲げて縁を作り，口縁部の立ち上がりを1条と2条と3条の沈線で区切り，それぞれの区画を波状文で飾っている。胴部は外面が平行タタキ，内面が同心円文タタキである。多くの破片が残っているが，復原できたのは口縁と肩部の一部分のみである。	

第９表　４号穴出土遺物観察表(Ⅲ)

№は第15図に対応する
(須)は須恵器を表す

№	種類	法量	形態・調整の特徴など	備考
1	坏 (須)	口径 13.2cm 器高 4.3cm	全体に回転ナデ調整による整形。天井部は不定方向のナデつけ。内面中央部は不定方向の静止ナデを施している。器形は丸みを帯び，天井部と口縁部の境の段等はない。口縁はわずかに内傾している。完形で残存。	胎土　わずかに長石微粒を含む 焼成　悪い 色調　(外)(内)淡白褐色 ロクロ　右回転
2	蓋 (須)	口径 11.2cm 器高 4.4cm	全体に回転ナデ調整による整形。器形は丸みを帯び，天井部はナデた後，ヘラ記号を描いている。天井部と口縁部の境の段等はない。焼き歪みが顕著である。完形で残存。	胎土　石英・長石微粒を多く含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰～淡灰色 ロクロ　右回転
3	坏 (須)	口径 11.1cm 受部径 13.6cm 器高 3.55cm	全体に回転ナデ調整による整形。内面中央部は回転ナデ後，不定方向の静止ナデを施している。底部はヘラ切り。立ち上がりは厚く，短く，内傾している。外面は一部灰かぶりである。完形で残存。	胎土　石英・長石微粒を少々含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
4	坏 (須)	口径 9.3cm 器高 3.8cm	底部外面のみ回転ヘラ削り調整で，ほかは回転ナデによる整形。底部外面ににはヘラ記号「×」が描かれている。	胎土　石英・長石微粒を少々含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　灰色

論田５号穴

●遺　構（第16図）

論田４号穴の南に位置し，主軸を南北にとる。玄室床面より30cm上方のところまで全面的に削平されており，特に玄室は左側床面までえぐられており残りが悪い。

前庭は前が狭く，羨門に近づくにしたがって広くなる５穴の中では特異な例である。羨門直前での幅は2.1ｍを測る。前庭では火を焚いた跡が１カ所あり，まとまって炭が出土した。また，閉塞に使われたと思われる人頭大弱の石が散乱しており，その石の上から鉄鏃が１点出土した。よって，盗掘をうけた可能性が高いと思われる。

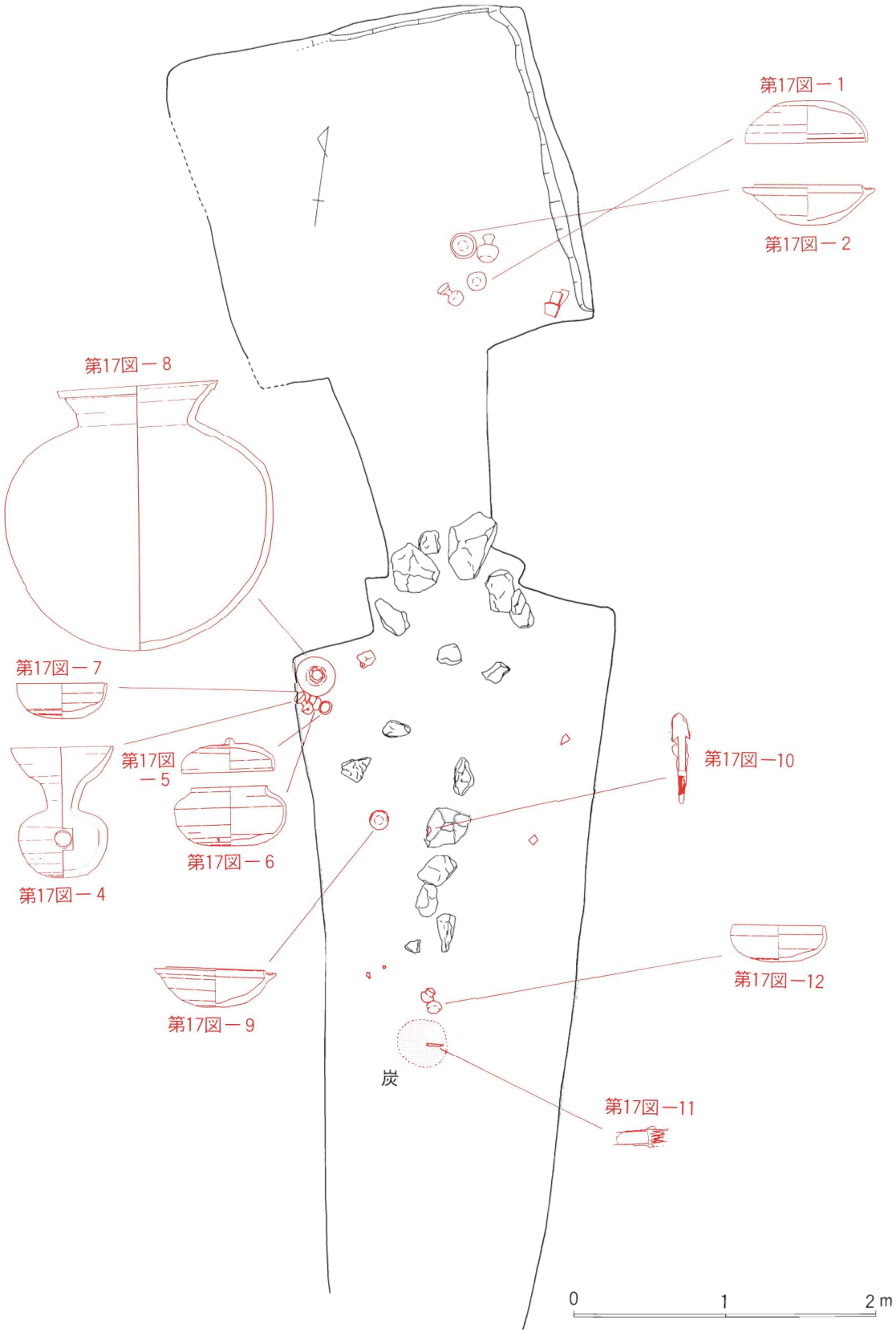
羨門部は幅１ｍ，奥行0.3ｍを測る。板を立てる溝様の遺構は認められず，閉塞石が一部残るのみである。

羨道は羨門側で幅0.7ｍ，玄門側で1.1ｍを測り，玄室に向けて広くなっている。奥行は1.2ｍである。

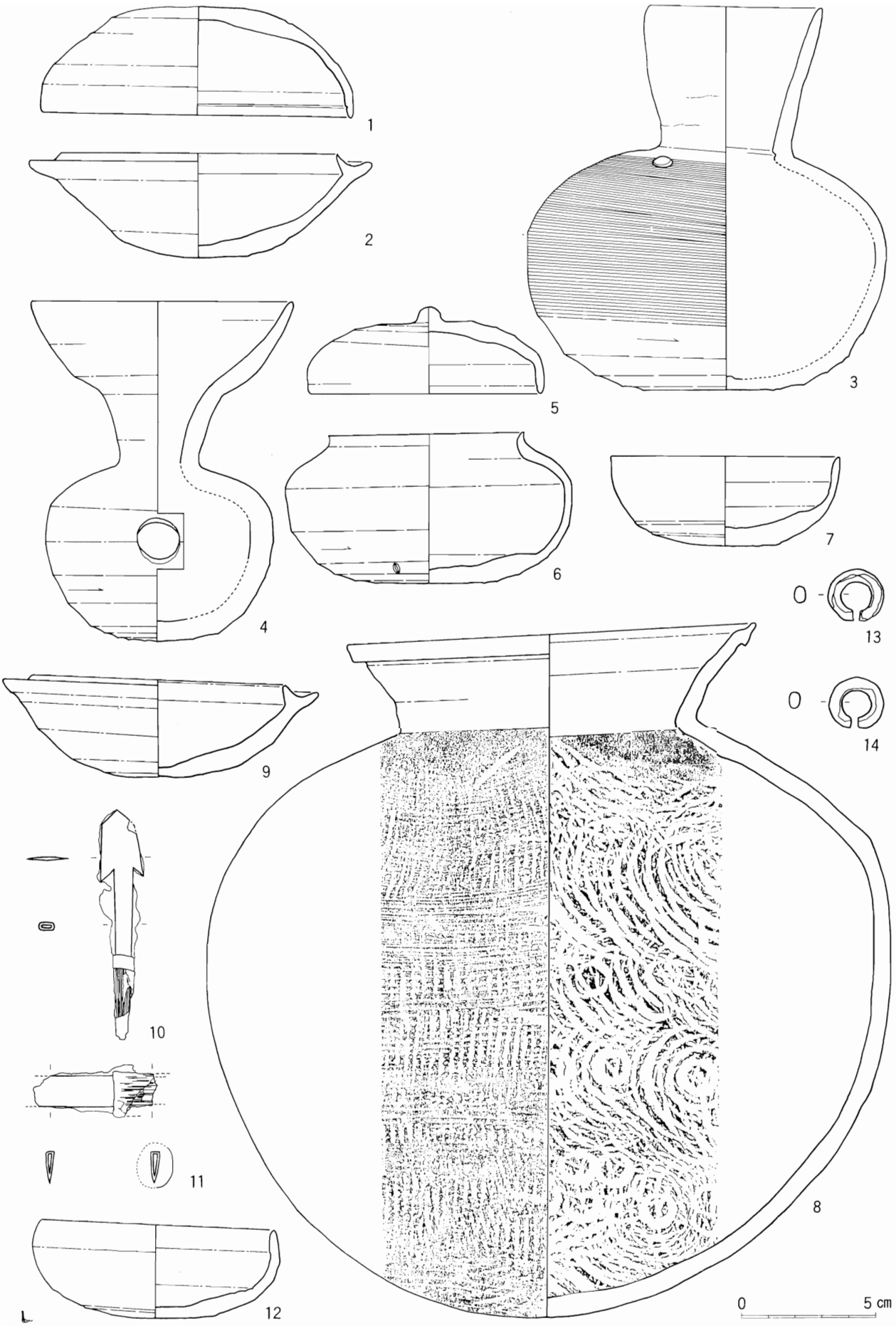
玄室は天井の形態は推定すらできないが，幅2.35ｍ，奥行2.2ｍを測りほぼ正方形を呈している。排水溝は右袖側壁側と奥壁側にのみ掘りこんでいる。

●遺　物（第17図）

遺物出土状況は，前庭では鉄鏃１，鉄刀子１，受部を持つ坏１と，それとセットになる蓋１が原位置とは思えない位置から出土したほか，羨門直前の左側角から原位置を保った状態で甕１，蓋１，坏１，短頸壺１，甑１がまとまって出土した。玄室内からは右袖前壁側角に甕片数点，やや中央よりか



第16図　論田５号穴平面図および遺物出土状況



第17図　5号穴出土遺物実測図

ら蓋１，坏１，平瓶１，甕１が出土した。耳環２個も出土しているが，出土地点については不明である。

個々の遺物の詳細は第10表を参照されたい。

ところで，玄室内から出土した蓋坏は坏に受部を持つタイプのセットであったのに対し，前庭部から出土した蓋坏は蓋に突起状つまみとかえりがつく新しいタイプのセットであった。玄室内より前庭から新しい遺物が出土しているのは，後世の墓前祭祀によるものと理解するが，他の横穴に較べてこの横穴の使用期間が短いようである。盗掘で事実が歪められていない限り，この横穴の初葬時期は６世紀末で，追葬期間は最大限７世紀前半後葉までであろう。

第10表　５号穴出土遺物観察表

№は第17図に対応する
(須)は須恵器を表す

№	種類	法量	形態・調整の特徴など	備考
1	蓋 (須)	口径　11.6cm 器高　4.1cm	全体に回転ナデ調整による整形。天井部はヘラ切り。天井部と口縁部の境の存。	石英・長石微粒を少々含む 焼成　良好 色調　(外)(内)淡灰色 ロクロ　右回転
2	坏 (須)	口径　10.2cm 受部径　12.6cm 器高　3.9cm	全体に回転ナデ調による整形。底部はヘラ切り。立ち上がりは短く，内傾し，先端が尖っている。完形で残存。	胎土　石英・長石微粒を少々含む 焼成　良 色調　(外)(内)淡灰色 ロクロ　右回転
3	平瓶 (須)	口径　6.4cm 器高　14.4cm	口縁部は回転ナデ調整による。所々に粘土の積み上げ痕が残っている。肩部から胴部はカキメ調整後，偏平な円形の突起を２カ所に張り付け，ヘラ記号「×」を描いている。底部は回転ヘラ削りを施しており，そこにもヘラ記号	胎土　長石微粒をわずかに含む 焼成　良色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
4	甕 (須)	口径　9.7cm 器高　12.7cm	全体に回転ナデ調整による整形。底部のみ回転ヘラ削り。器形の退化が著しく，口縁は緩やかにラッパ状にひらき段はつかない。沈線は全て消え去っている。完形で残存。	胎土　石英・長石微粒を少々含む 焼成　良 色調　(外)(内)淡灰色 ロクロ　右回転
5	蓋 (須)	つまみ径　0.9cm 口径　8.2cm 器高　3.2cm	天井部は回転ヘラ削り，そのほかは回転ナデ調整による整形。天井部には小さな突起状のつまみが張り付けられている。口縁はほぼ垂直に下垂する。完形で残存	胎土　石英・長石微粒を少々含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰色 ロクロ　右回転
6	小壺 (須)	口径　7.2cm 器高　5.7cm	胴部上半は回転ナデ，下半は回転ヘラ削り調整による整形。口縁先端が尖る無頸壺。回転ヘラ削り調整を施した後の籾痕が残っている。一部欠損するがほぼ完形で残存。	胎土　長石微粒を少々含む 焼成　良好 色調　(外)(内)淡灰色 ロクロ　右回転
7	坏 (須)	口径　8.6cm 器高　3.4cm	全体に回転ナデ調整による整形。底はヘラ切り。口縁は垂直に立ち上がる。 口縁端を少々剝落するが，ほぼ完形で残存。	胎土　石英・長石微粒を密に含む 焼成　良好 色調　(外)淡灰色　(内)黒灰色 ロクロ　右回転
8	壺 (須)	口径　14.2cm 器高　25.9cm	口縁部は回転ナデ調整による整形。外面にヘラ記号「×」を描いている。胴部の器形はほぼ球形で，外面は平行文タタキ後ところどころにカキメをめぐらし，内面は同心円文タタキによる。口縁部を約半分欠損。	胎土　石英・長石微粒を少々含む 焼成　良好 色調　(外)(内)灰～淡灰色 ロクロ　右回転
9	坏 (須)	口径　9.4cm 受部径　11.7cm 器高　3.85cm	全体に回転ナデ調整による整形。底部はヘラ切り。立ち上がりは低く，厚く内傾している。完形で残存。	胎土　石英・長石微粒を多く含む 焼成　良好 色調　(外)(内)淡灰色 ロクロ　右回転

No	器種	法　　量	形態・調整の特徴など	備　　考
10	鉄器	長　さ　7.5cm 刃部最大幅　1.5cm 長　さ　2.7cm	鎌 かえりを有する５角形の有茎鏃である。茎部分の一部には木質が残り，木質部の先端には茎を柄に装着させるために巻かれた皮も残っている。茎の断面は方形を呈している。	
11	鉄器		刀子。 刃部の先端と中子の端を欠損する。木質が一部残っており，その断面は縦に長い1.7×1.4cmの楕円形を呈している。	
12	坏 (須)	口　径　8.6cm 器　高　3.7cm	全体に回転ナデ調整による整形。底はヘラ切り。口縁部はやや内傾している。口唇を少々欠くがほぼ完形。	胎土　長石微粒を密に含む 焼成　良好 色調　(外)(内)淡灰色 ロクロ　右回転
13	耳環	外径　1.95×2.05cm 内径　1.05×1.2cm 断面　0.45×0.6cm	青銅の芯に金箔が約1/3残存。	
14	耳環	外径　1.90×2.05cm 内径　1.0×1.1cm 断面　0.4×0.6cm	青銅の芯に金箔が残るが，ほとんど剝離しかけている。	

小　　結

論田横穴群は，工事中に偶然発見されて調査に至ったものである。緊急調査期間中に５穴について調査を実施しているが，丘陵斜面の黒褐色土層の広がりや，周辺の廃土中に見られる大量の須恵器片の散乱状況から判断して実際には７穴以上の横穴が存在していたと考えられている。当時の短期間調査の中では最大限の努力がはらわれたこととはいえ，横穴群の全貌が調査できなかった事は非常に残念なことである。

さて，論田横穴群の５穴はいずれも初葬時期は６世紀末で，ほぼ同時期と考えられる。にもかかわらず，さまざまなタイプの横穴が混在していた。天井部は破壊されて観察不可能であったが，玄室内に石棺を持つもの，屍床に須恵器片を敷きつめるもの，全周に排水溝がめぐるもの，ほとんど排水溝をもたないもの，前庭が前方に広がるもの，狭まるもの等々である。また，最後の追葬がおこなわれた時期についても６世紀前半後葉から８世紀初頭までとかなりばらつきがみられる。

一方，５穴の共通点としては，横穴墓にしては須恵器以外の副葬品が非常に少ないという事があげられる。盗掘にあった可能性も十分考えられるので断言はできないが，須恵器以外の副葬品といえば，５穴全体で耳環４，鉄刀子１，鉄鏃１，用途不明の鉄器１のみであった。また，前庭左奥角に後世の墓前祭祀の際供献されたと思われる，玄室内には見られない新しいタイプの須恵器がまとまって出土している。これは４号穴と５号穴の２穴についての共通事項である。

論田横穴群は時期的にみて，論田４号墳の被葬者に継ぐ世代の埋葬施設と考えられる。立地から判断すると論田４号墳の被葬者（集団）の末裔たちの埋葬施設である可能性が高い。その根拠は同じ丘陵の上と斜面に立地している……同丘陵を聖なる墓地として利用しているというだけなのだが，そう考えてほぼ間違いないだろう。同じ地域の埋葬形態の変遷をみることができて興味深い史料である。この丘陵の周辺にはまだまだ知られていない貴重な遺跡が眠っていることだろう。繰り返しになるが，今後の開発に際してはさらなる注意が必要である。

最後に……昭和60年の現地調査もきわめて短期間の緊急調査であったが，今回付編として報告書に掲載しようと思いついたのは平成６年１月に入ってからのことで，これまた緊急整理とあいなった。なにしろ筆者自身が現地を見たことがなかったので，特に遺構図面に関しては悪戦苦闘の連続であった。間違いは記していないつもりであるが，遺構図原図，遺物は松江市教育委員会が管理しているので，詳細を知りたい方は是非実見いただきたい。

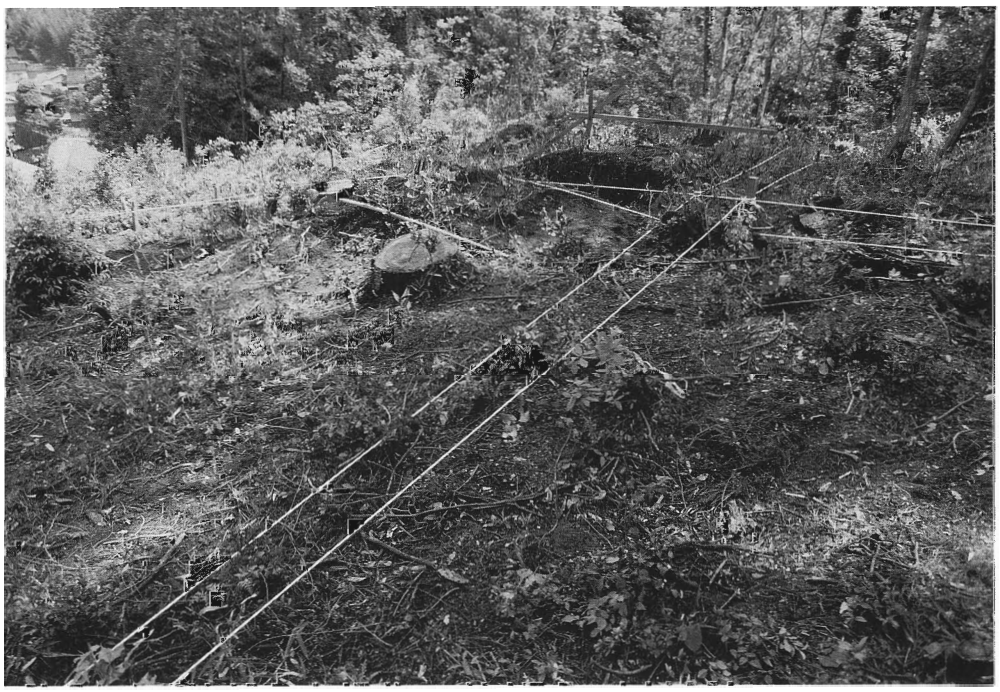
この概要報告が少しでも多くの人々の目に触れ，消滅してしまった論田横穴群への導入口になればと願っている。

論田4号墳

写真図版

図版1　作業風景

図版 2　論田 4 号墳調査前(北より)



図版 3　墳頂(畦設定状況)

図版 4　周溝平面プラン検出状況(南より)

図版 5　山手側周溝セクション(東より)

図版6　残丘検出状況

図版7　残丘検出状況

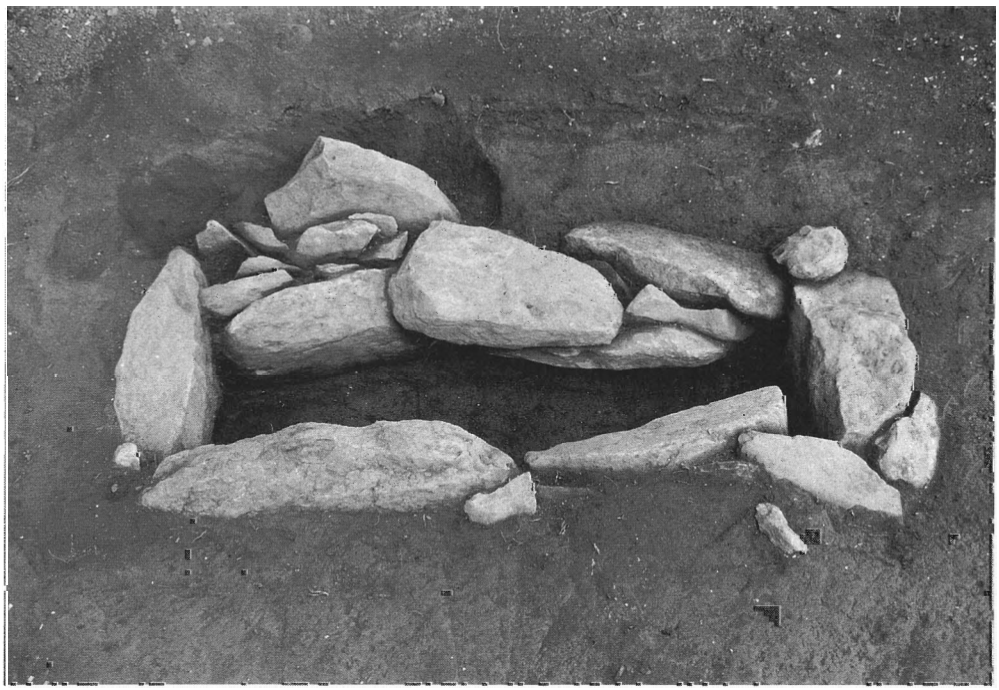
図版 8　主体部セクション検出状況(東より)

図版 9　主体部内遺物出土状況(西より)

図版10　主体部検出状況（南より）

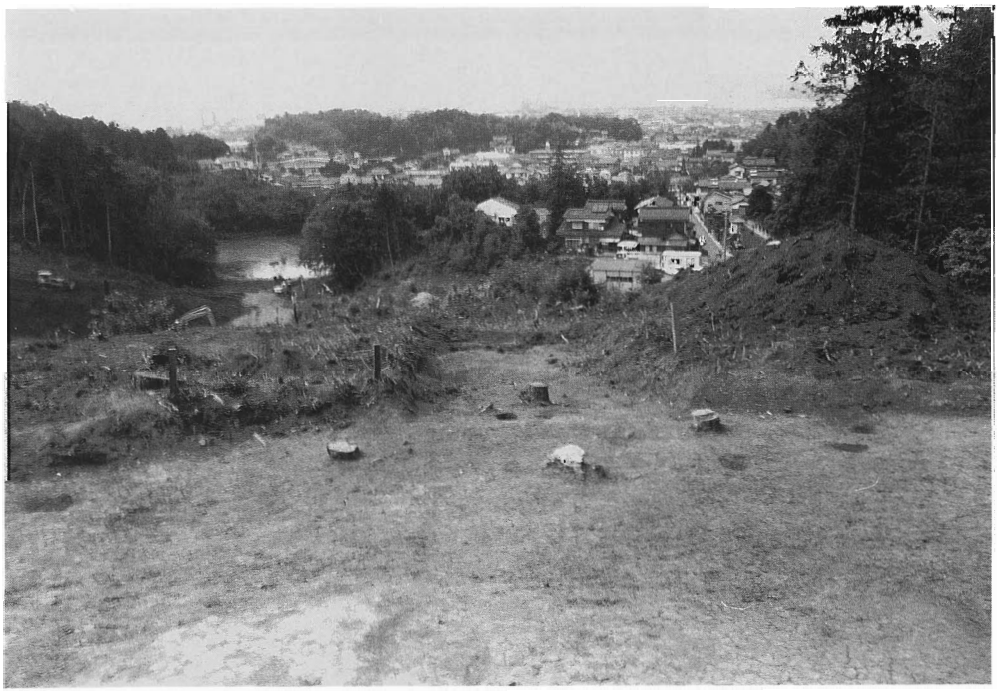
図版11　主体部検出状況（東より）

図版12　排水溝検出状況(西より)



図版13　小　型　石　棺

図版14　盛土除去後(北西より)



図版15　論田４号墳から松江市街(北方)を眺む

1

6

2

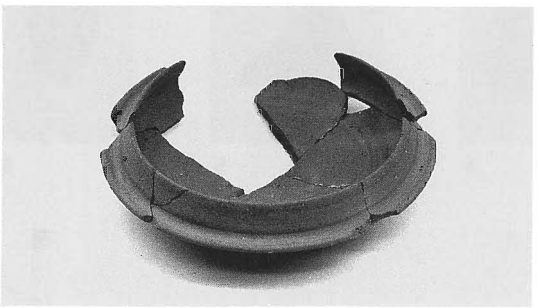
7

3

8

4

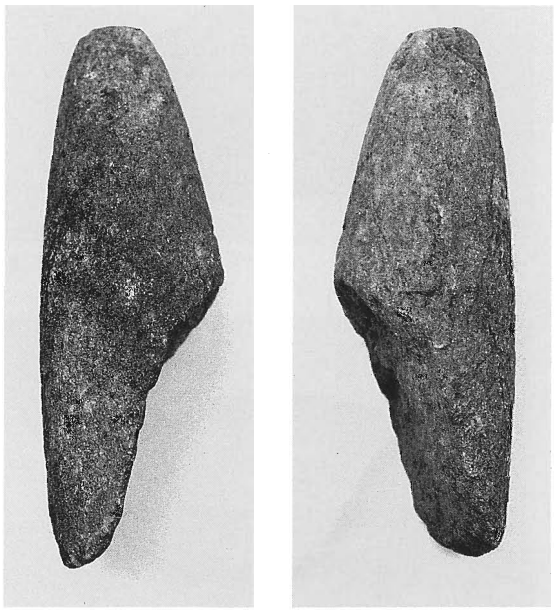
9



5

（番号は第７図に対応する。）

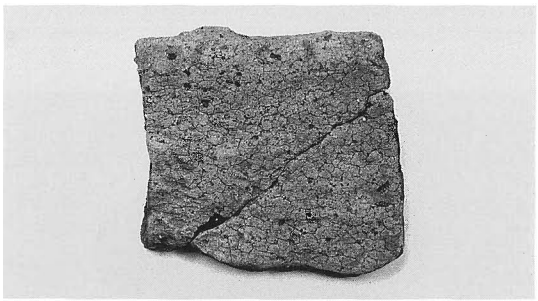
図版16　論田４号墳主体部内出土須恵器



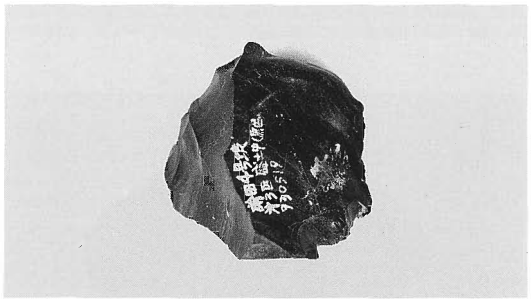
1

2

図版17　論田４号墳盛土内出土遺物



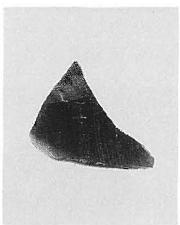
1



2

3

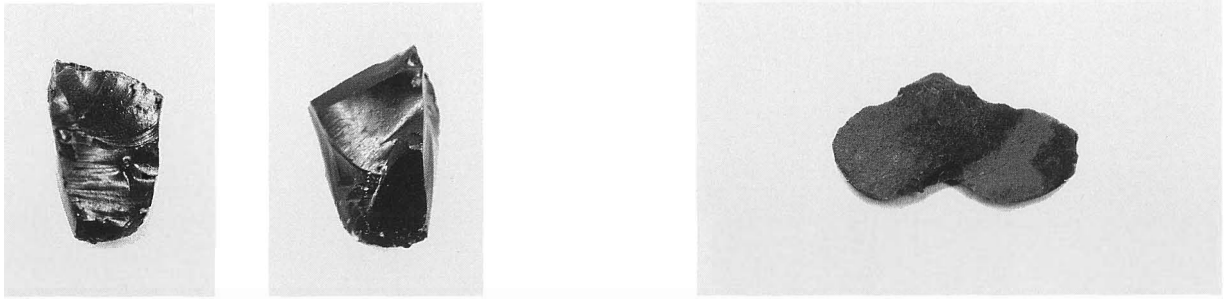
4



5

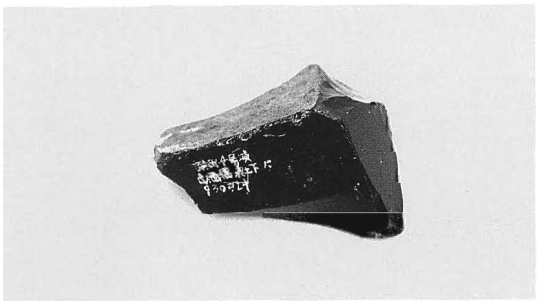
6

図版18　論田４号墳盛土内出土遺物



1　　2

図版19　土壙１内出土遺物



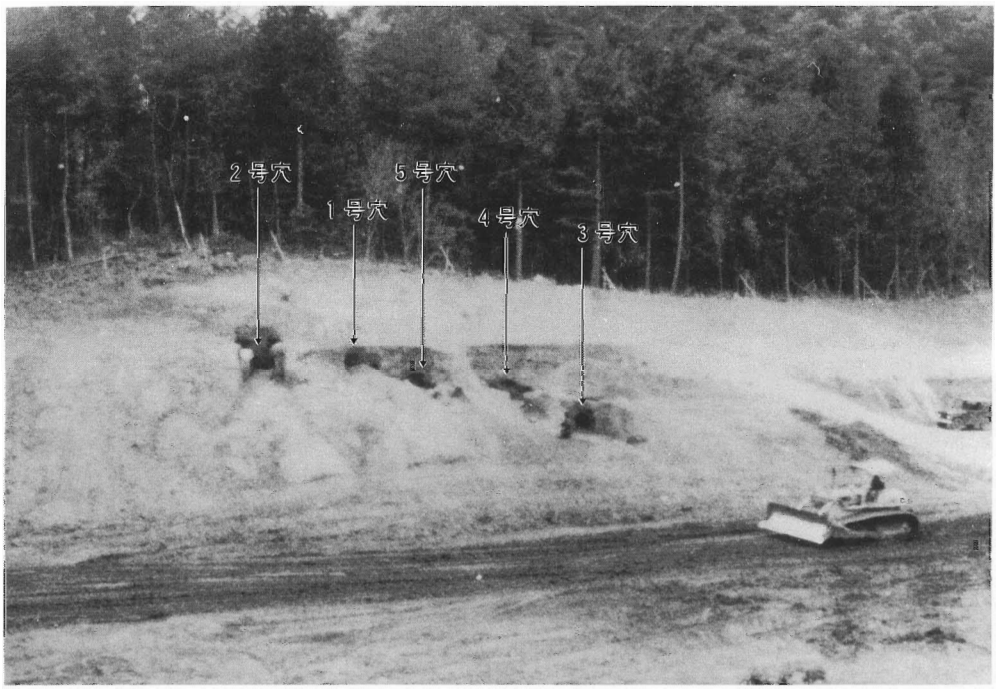
図版20　遺構に伴わない遺物

論田横穴群

写真図版

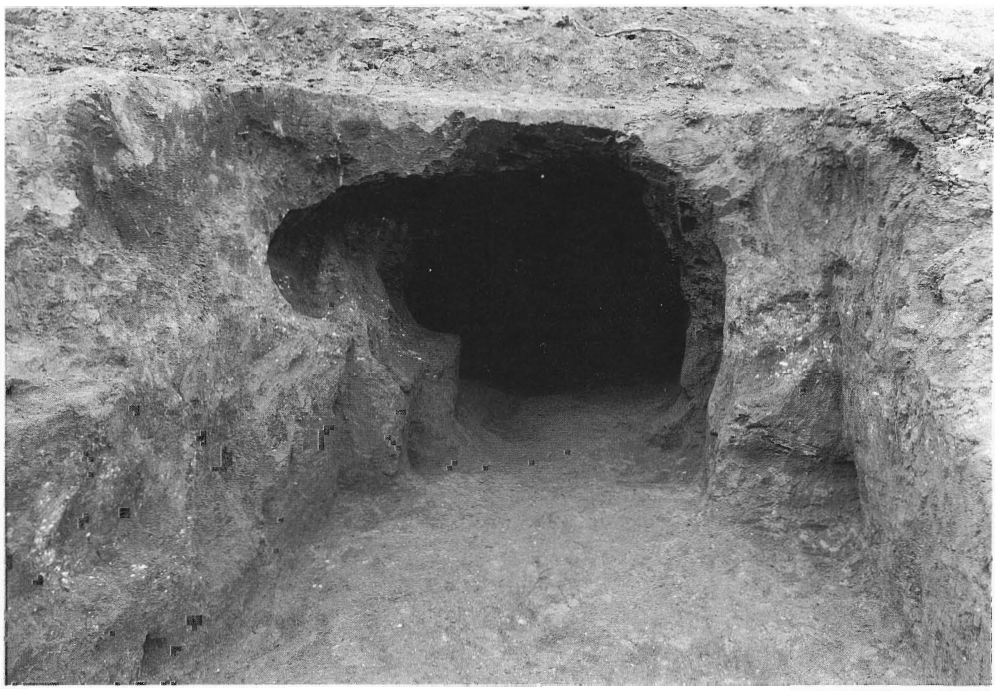
図版１　発見当初の論田横穴群

図版２　論田横穴群遠景



図版３　論田横穴群近景（左より　２号穴，１号穴，５号穴，４号穴，３号穴）

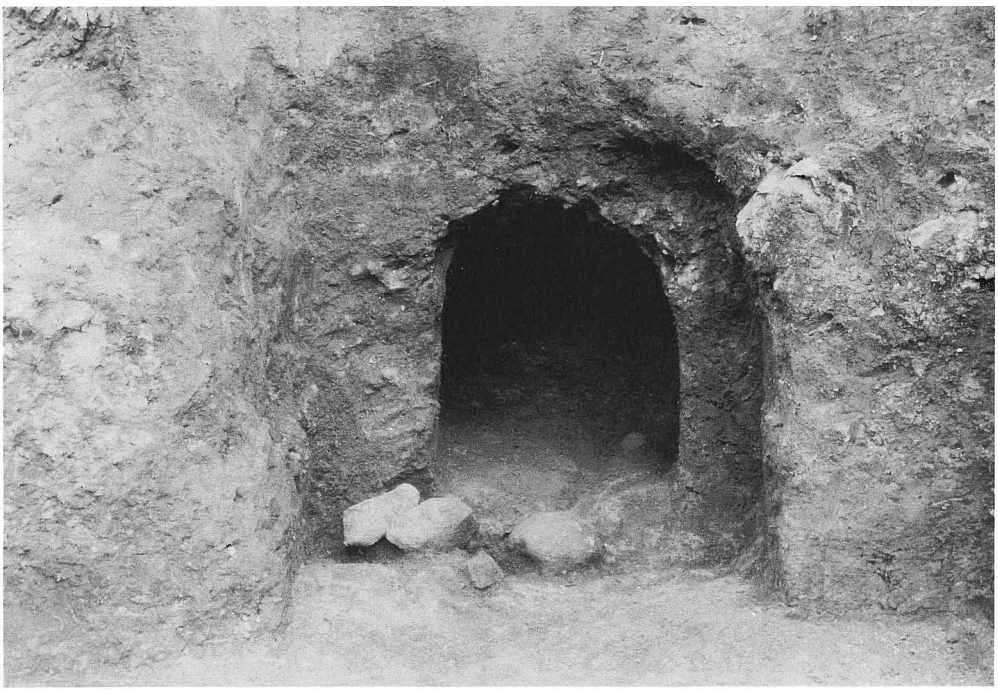
図版4　2号穴前庭遺物出土状況



図版5　2号穴羨門

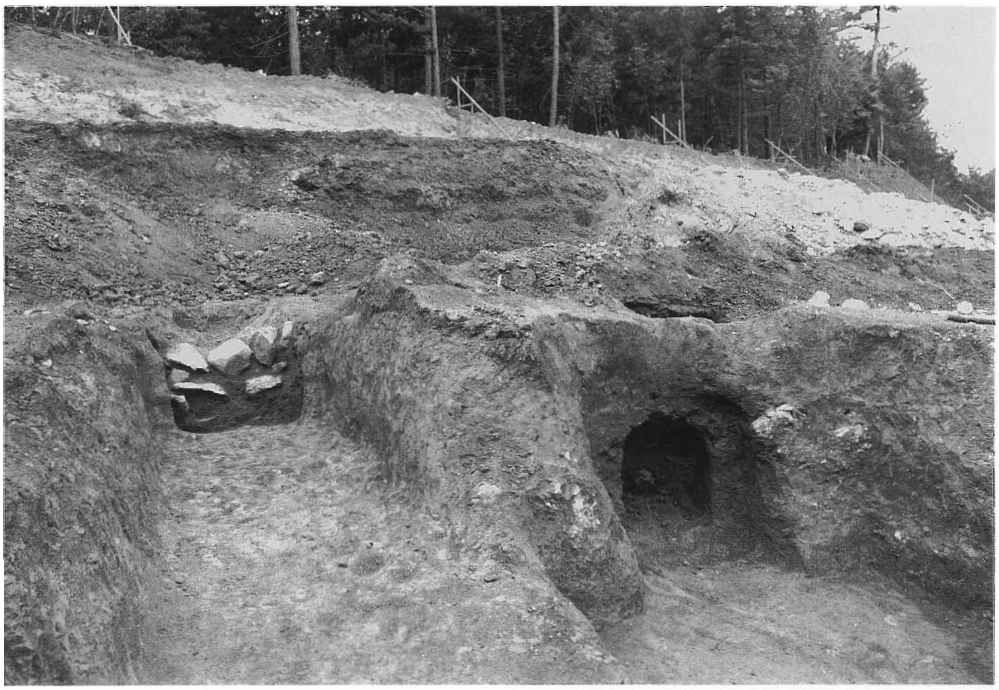
図版６　２号穴組み合せ横口式家形石棺（入口側より）

図版７　２号穴組み合せ横口式家形石棺（横から）



図版8　3 号 穴 羨 門

図版9　3号穴玄室内遺物出土状況



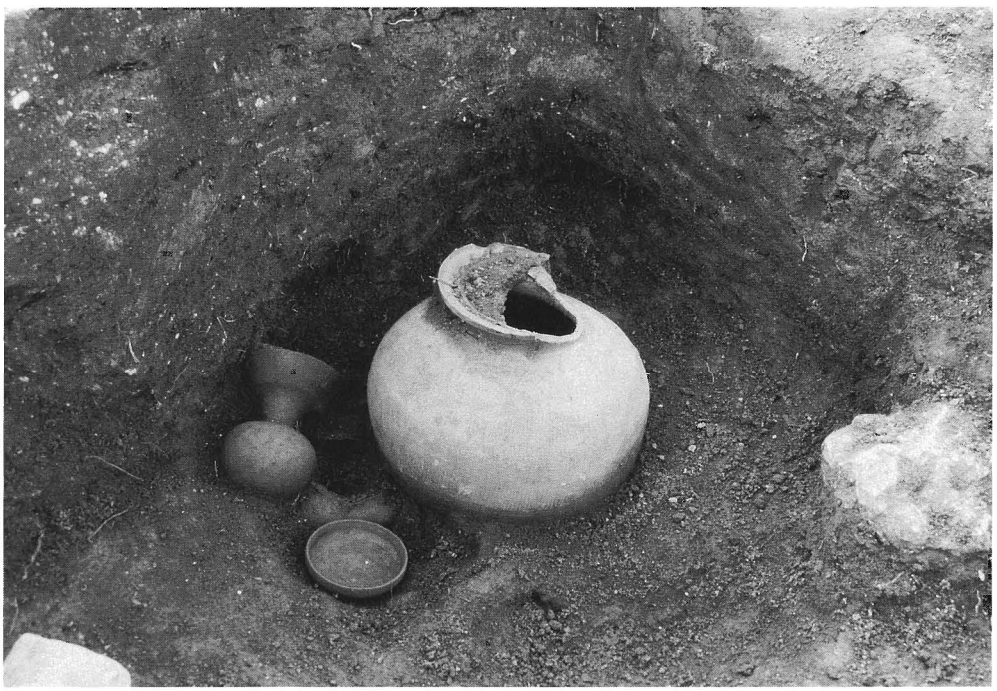
図版10　3号穴(右)と4号穴(左)の位置関係

図版11　4 号 穴 羨 門

図版12　4号穴前庭奥左角遺物出土状況

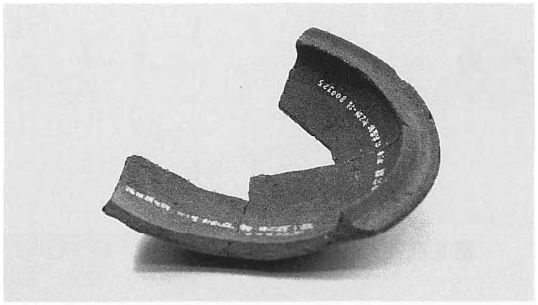
図版13　4号穴玄室(須恵器床と遺物出土状況)

図版14　5号穴(前庭から)



図版15　5号穴前庭奥左角遺物出土状況

図版16　論田１号穴出土遺物

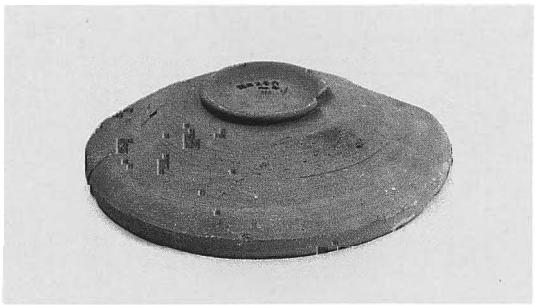


第２図-2

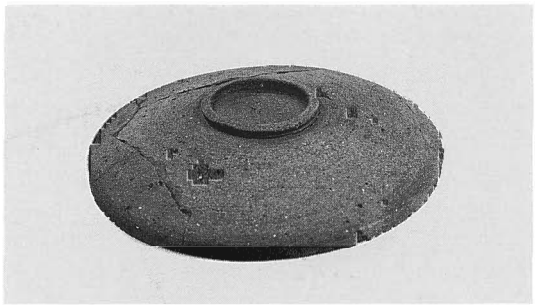
図版17　論田２号穴出土遺物

第５図-1

第５図-2



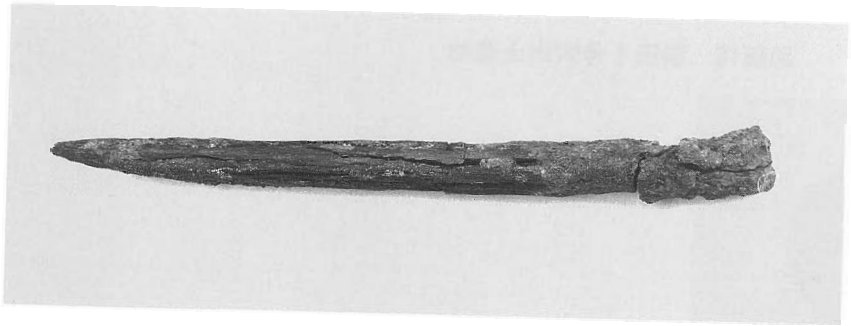
第５図-3



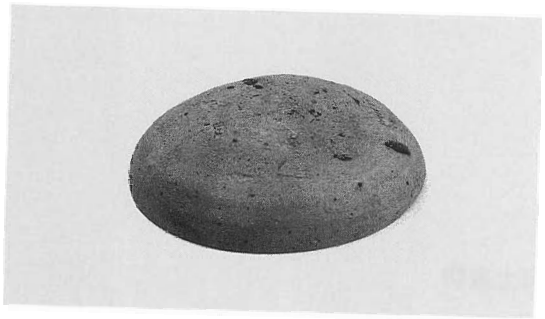
第５図-4

第５図-5

第５図-6

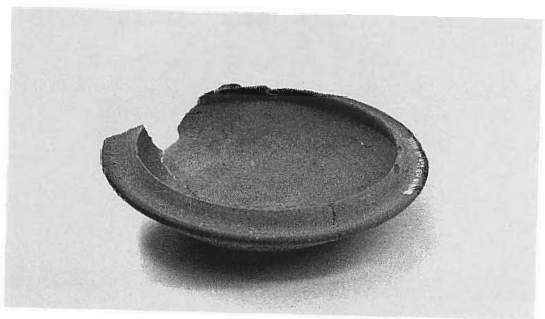


第 5 図-7

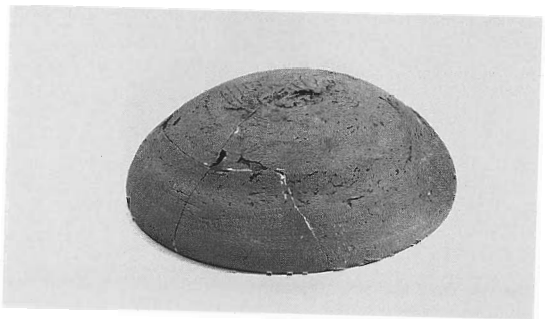


第 6 図-1

第 6 図-2



第 6 図-3

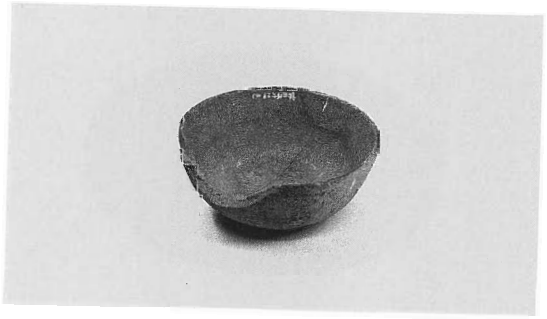


第 6 図-4

第 6 図-5

第 6 図-6

第 6 図-7

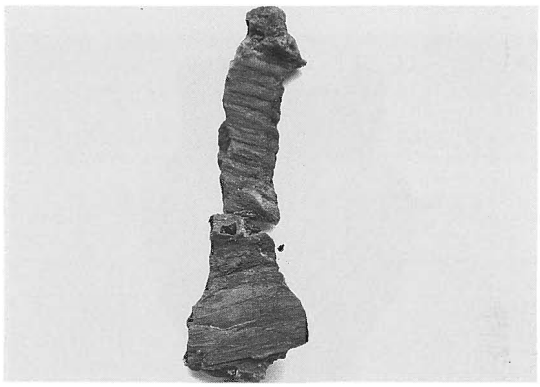


第 6 図-9

第 6 図-10

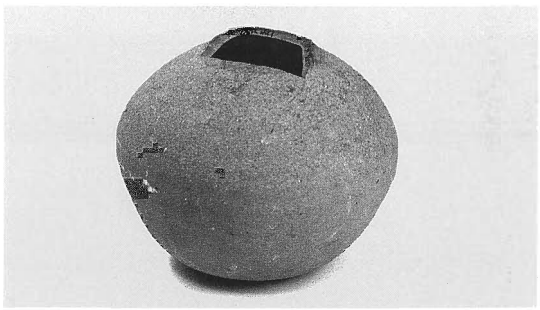
第 6 図-11

第 6 図-12



第 6 図-13

第 7 図-1



第 7 図-2

図版18　論田 3 号穴出土遺物

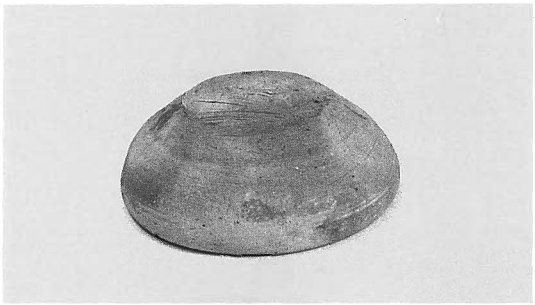
第10図-1

第10図-2

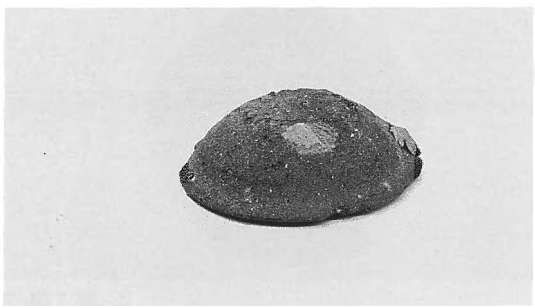
第10図-3

第10図-4

第10図-5



第11図-1



第11図-2

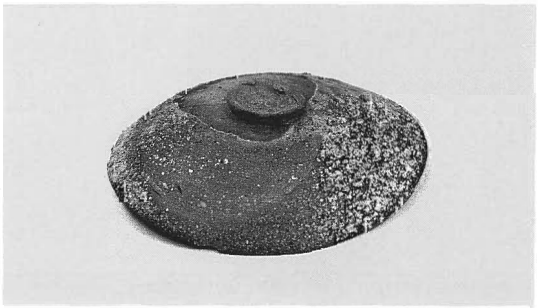
第11図-4

第11図-5

第11図-6

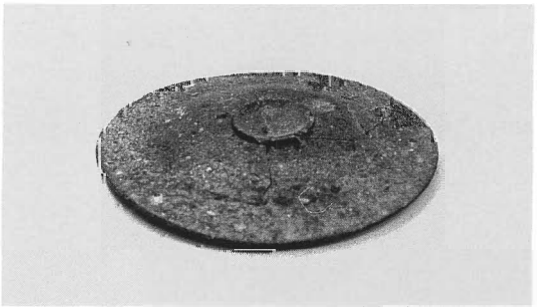
第11図-7

図版19　論田４号穴出土遺物

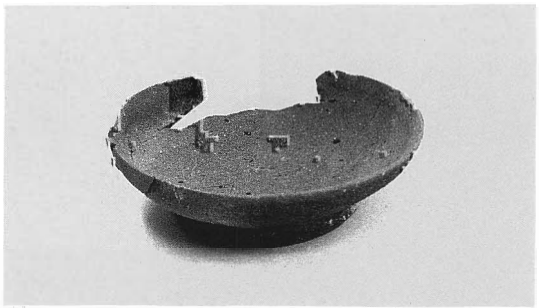


第13図-1

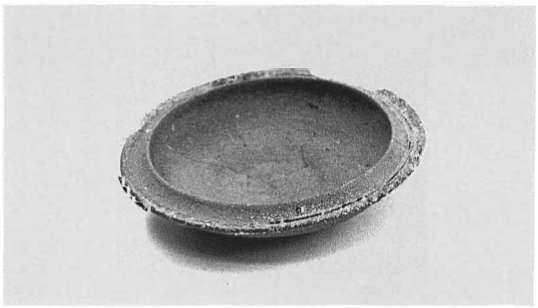
第13図-2



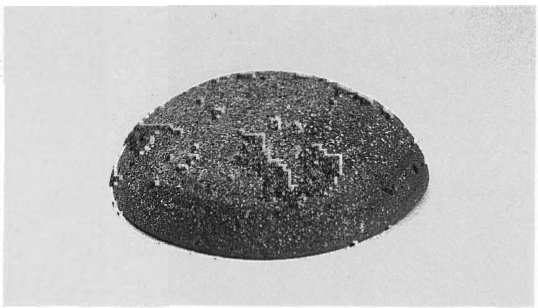
第13図-3



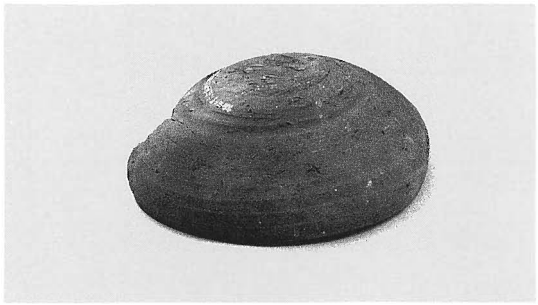
第13図-4



第13図-6

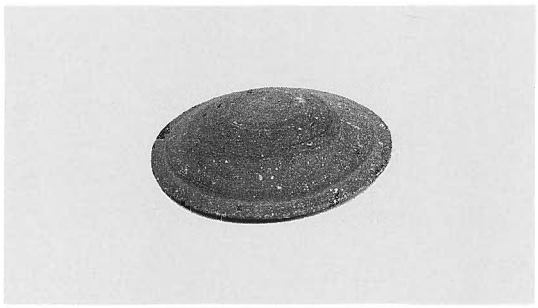


第13図-7

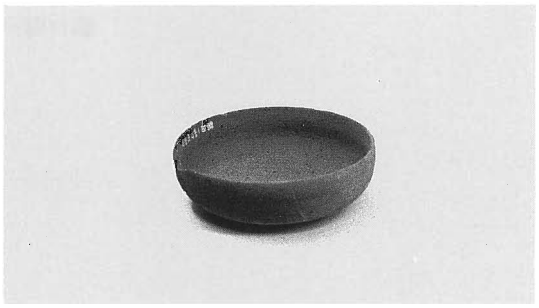


第13図-9

第13図-10



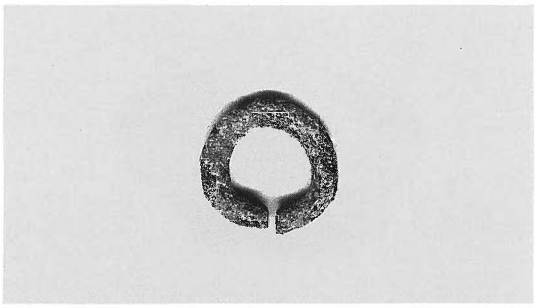
第13図-11



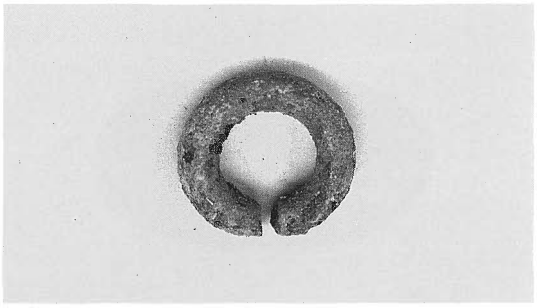
第13図-13

第13図-14

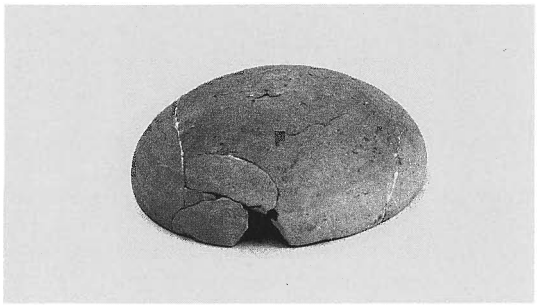
第13図-15



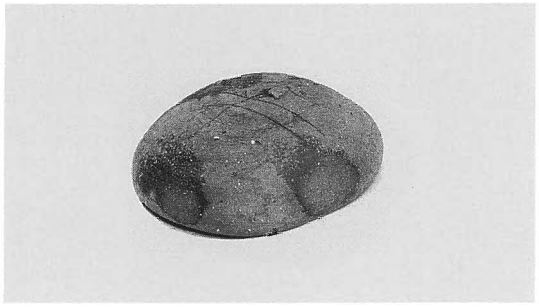
第13図-16



第13図-17

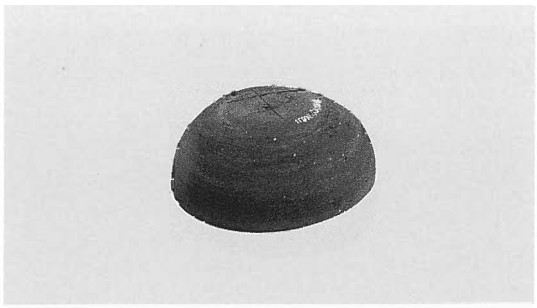


第15図-1

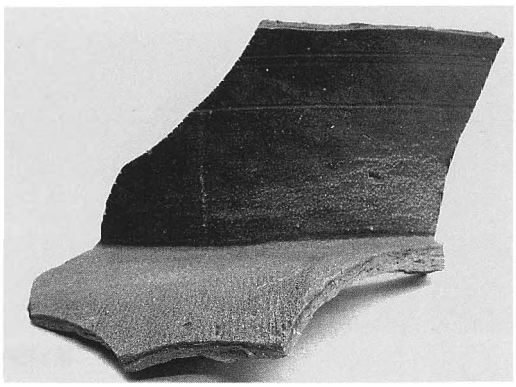


第15図-2

第15図-3

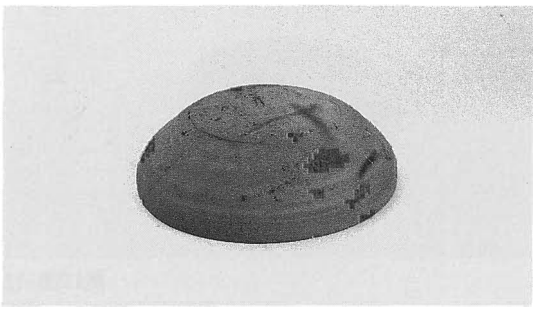


第15図-4



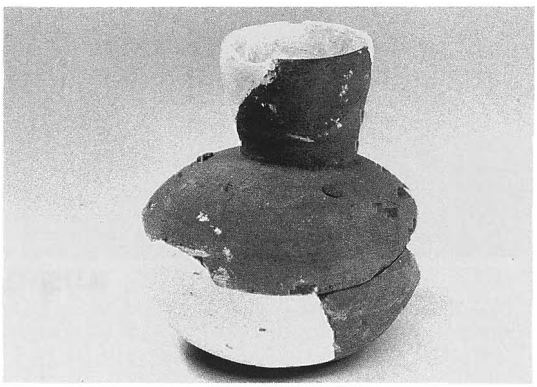
第14図

図版20　論田５号穴出土遺物



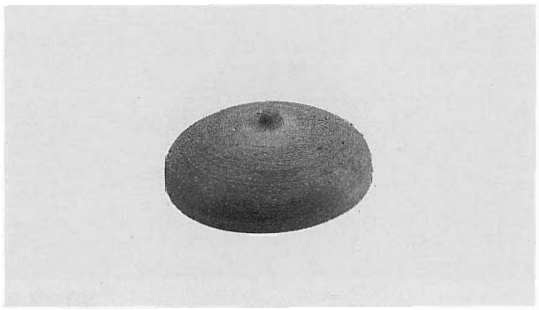
第17図-1

第17図-2

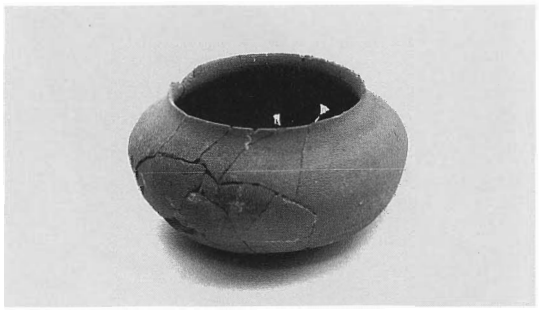


第17図-3

第17図-4

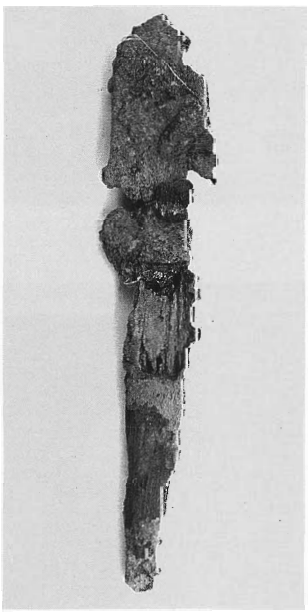


第17図-5



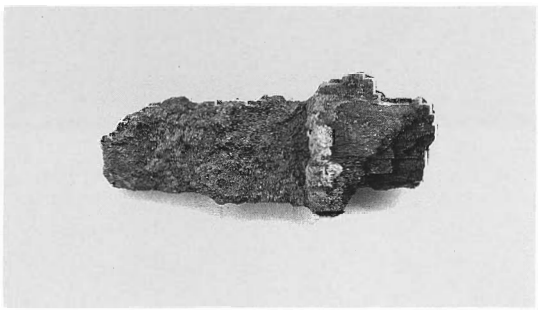
第17図-6

第17図-9

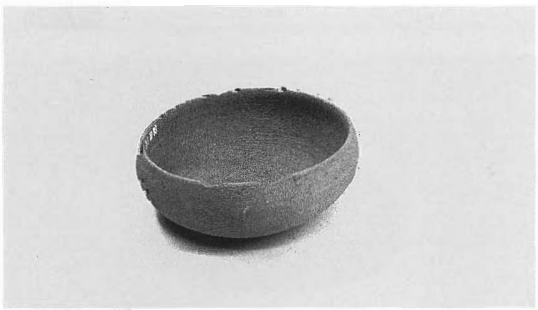


第17図-10

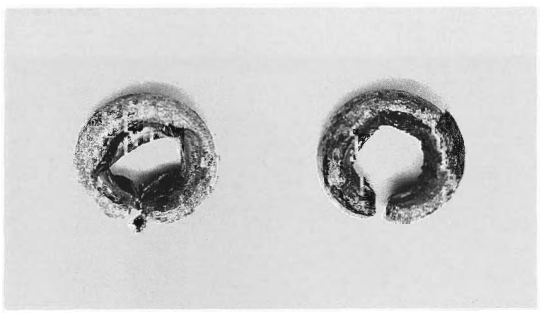
第17図-8



第17図-11

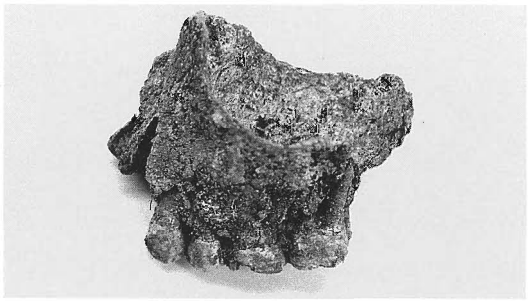


第17図-12

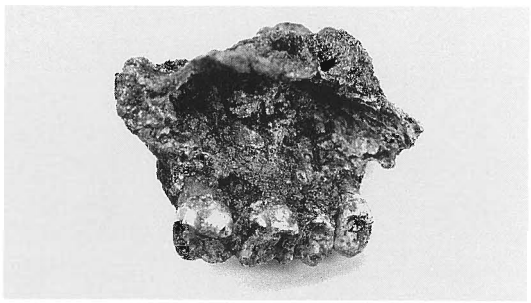


第17図-14　第17図-13

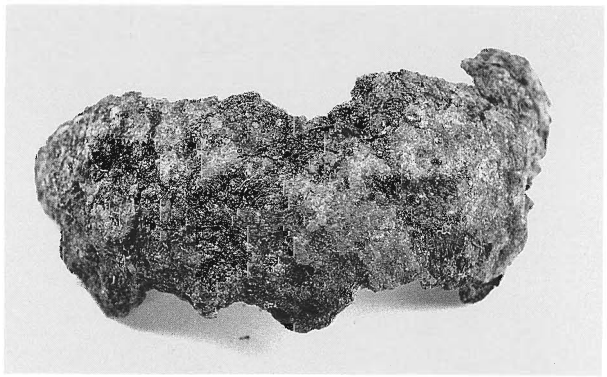
図版21　論田４号穴出土人骨



歯（表）



歯（裏）



頭骸骨

論田４号墳発掘調査報告書

（付編 論田横穴群概要報告）

1994 年 3 月

発　行　　㈶松江市教育文化振興事業団

印　刷　　有限会社　谷　口　印　刷

松江市母衣町89